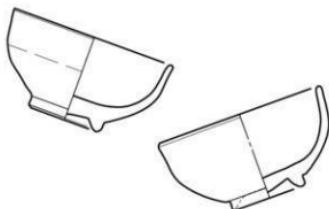


仙台市文化財調査報告書第471集

仙 台 城 跡 13

— 平成29年度 調査報告書 —



2018年3月

仙台市教育委員会

卷頭図版 1 第 28 次調査（造酒屋敷跡 5 次）



調査区全景（北東から）



KS-1075（南東から）



KS-1083（南東から）



KS-1086・1087（南東から）



北区東側（南から）

卷頭図版 2 第 29 次調査（三の丸土壙 3 次）



東区断面（南西から）



東区断面（南から）



東区土壙部分断面（南から）



西区東端下部 XVIII 層（南から）



西区断面（南から）

序 文

平成 29 年は、初代仙台藩主伊達政宗が永禄 10 年（1567）に生まれてから 450 年となる節目の年です。仙台市は、慶長 5 年（1600）に伊達政宗が仙台城の縄張りを開始し城下のまちづくりをおこなってから四百年余りが過ぎた現在、人口 100 万人を越える東北地方の中心都市となりました。現在の仙台市発展の契機となった仙台城跡は、ビルが林立する市の中心部から最も近い緑豊かな場所として、青葉城や天守台といった愛称で市民から親しまれてきました。

仙台城跡は、平成 9 年度から 16 年度までおこなわれた本丸石垣修復工事に伴う発掘調査や、平成 13 年度から始められた国庫補助による学術調査によって、中世の山城であった千代城期や、伊達氏の居城期の内容が徐々に明らかとなってきました。これらの発掘調査から得られた成果により、我が国の近世を代表する城郭遺跡であることが評価され、平成 15 年 8 月、国の史跡に指定されました。これを契機として、仙台城跡の保存管理及び整備に向けた、「仙台城跡整備基本計画」が策定され、保存・活用のため、史跡の追加指定や本丸の中心建物である大広間遺構の復元整備もおこなわれました。

平成 23 年に発生した東日本大震災では、仙台城跡の石垣に大きな被害がありました。伝統工法にもとづく復旧に努め、文化財としての価値を損なうことなく後世に残すことができました。また、災害復旧事業に伴い、「仙台城跡整備基本計画」に大幅な変更が生じたため、平成 29 年 11 月には新たな計画を策定するための「仙台城跡保存活用計画等検討委員会」が発足し、仙台城跡の新たな魅力を引き出すための取り組みが始まりました。

本報告書は、平成 29 年度に行われた造酒屋敷跡と三の丸土壘の学術調査の成果をまとめたものです。これまでに造酒屋敷跡では 4 次にわたる調査がおこなわれ、酒造りに関係する遺構や遺物が見つかっています。造酒屋敷は城内で酒造りを行った全国でも稀な場所です。今回は、造酒屋敷の遺構確認と実態解明を目的に第 5 次調査をおこない、土地の造成に関わる跡や、屋敷地を維持していくために必要な水を管理する施設の一端が垣間見えてきました。また、三の丸土壘についてはこれまで部分的にしか確認していなかった土壘を調査し、その規模や特徴を明らかにすることができました。土壘内側にあたる三の丸の時期的な変遷を明らかにする上で重要な成果となりました。

最後になりましたが、今回の調査事業及び調査報告書の刊行にあたり、多くの方々からご指導、ご協力を賜りましたことを深く感謝申し上げますとともに、本報告書は調査事業の内容だけではなく、調査成果についても報告、公開するものであり、研究者のみならず市民の皆様にも広く活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。

平成 30 年 3 月

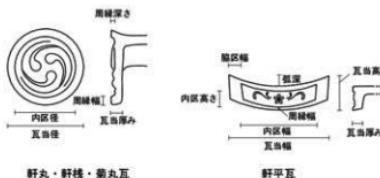
仙台市教育委員会
教育長 大越 裕光

例　　言

1. 本書は、文化庁の国庫補助事業として実施した、国史跡仙台城跡の平成29年度遺構確認調査造酒屋敷跡第5次調査（全体第28次調査と三の丸土塁跡第3次調査：全体第29次調査）の報告書である。
2. 本書に關わる国史跡仙台城跡の調査については、平成29年5月19日付 29受府財第4号の71にて文化庁長官の許可を得て実施した。
3. 発掘調査および整理作業は、鈴木隆、斎藤健一、工藤哲司、斎野裕彦、小林航（仙台市教育委員会文化財課）が担当した。本書の作成は、I～IIIを斎藤が執筆し、IVを鈴木、Vを工藤が執筆した。本書の編集は、鈴木が行った。
4. 調査および整理参加者
阿部千加子、太田裕子、菅家婦美子、田中春美、菱沼ミノリ、増田瑞枝、茂泉真由美、結城龍子
4. 出土した陶磁器の鑑定は佐藤洋（仙台市教育委員会文化財課）が行った。
5. 調査成果について既に各種刊行物などで公表されているが、本書の記載内容がそれら全てに優先する。
6. 発掘調査および報告書作成にあたり、次の方々から御指導・御協力をいただいた。記して感謝する。（敬称略・順不同）
北野博司（東北芸術工科大学教授）　藤沢教（東北大学教授）
7. 本調査および報告書作成に係わる諸記録や出土遺物などの資料は、すべて仙台市教育委員会が保管・管理している。

凡　　例

1. 本書中の地形図は、仙台市作成の現況測量図(1:500)の他に、国土地理院発行の1:50,000『仙台』と1:10,000地形図『青葉山』の一部を使用している。
2. 本書の座標値は世界測地系に基づいており、図中の方位は座標北である。また、高さは標高値で記した。
3. 遺構略号は、全遺構に対して通し番号（国庫補助調査による検出遺構番号：KS-）を付した。
4. 本報告書の土色については、『新版標準土色帳』（古山・竹原：2001）を使用した。
5. 本書に使用した遺物図版の縮尺は、陶磁器類・土器類は1:3、瓦は1:6、金属製品・木製品は1:2を原則としており、その他の遺物は各図中に示している。遺構図版の縮尺については各図中に示している。
6. 遺物觀察表中の法量で（ ）で示した数値は、陶磁器類・土器類については推定復元値、その他の遺物については残存値を示している。また、「—」は計測不能を示している。
7. 遺物の付着物等について、以下のスクリーンショットで示した。
 煙・タール付着範囲
8. 遺物の計測部位については以下の図の通りである。



目 次

卷頭図版	
序 文	
例言・凡例	
目 次	
I はじめに.....	1
II 仙台城跡の概要.....	3
1. 地理的環境.....	3
2. 歴史的環境.....	3
3. 発掘調査.....	4
III 発掘調査の実績と計画.....	5
IV 第28次調査（造酒屋敷跡第5次）.....	7
1. 調査の概要.....	7
2. 基本層序.....	8
3. 検出遺構と遺物.....	19
4. まとめ.....	24
V 第29次調査（三の丸土塁第3次）.....	33
1. 調査の概要.....	33
2. 基本層序.....	35
3. 検出遺構.....	38
4. 出土遺物.....	41
5. まとめ.....	44
写真図版.....	45

報告書抄録

卷頭図版目次

卷頭図版 1 調査区全景（北東から）	
KS-1075（南東から）	
KS-1083（北から）	
KS-1086-1087（南東から）	
北区東側（南から）	
卷頭図版 2 東区断面（南西から）	
東区断面（南から）	
東区土塁部分断面（南から）	
西区東端下部断面（南から）	
西区断面（南から）	

挿図目次

第1図 仙台城跡と周辺の遺跡.....	1
第2図 仙台城跡周辺地形図.....	2
第3図 仙台城跡構造確認調査・測量調査区域位置図.....	6
第4図 第28次（造酒屋敷跡第5次）調査区配置図.....	7
第5図 第28次調査区全体区配置図.....	9-10
第6図 第28次調査区の岩盤・整地層分布図.....	12
第7図 第28次調査区土層断面図.....	13-14
第8図 第28次検出遺構断面図.....	16
第9図 第28次調査出土遺物（1）.....	17
第10図 第28次調査出土遺物（1）.....	18
第11図 造酒屋敷跡1～5次調査全体図.....	21
第12図 第29次調査地点の位置図.....	31
第13図 近世絵図に描かれた三の丸と土塁.....	32
第14図 三の丸跡の現況図と『第二師団経理部糧秣倉庫』図.....	32
第15図 第29次調査区平面図.....	34
第16図 第29次調査区断面図.....	34
第17図 KS-1117-1119 遺構平・断面図.....	36
第18図 KS-1120-KS-1121 実測図.....	37
第19図 KS-1123-1125-1126-1127 遺構実測図.....	38
第20図 第29次調査出土遺物（1）.....	40
第21図 第29次調査出土遺物（2）.....	41

挿表目次

第1表 これまでの調査実績.....	5
第2表 調査計画表と調査実績表.....	5
第3表 第28次調査土層記表.....	15
第4表 第28次調査出土遺物集計表.....	20
第5表 第29次調査出土遺物集計表.....	42

写 真 図 版 目 次

図版 1	1. 調査区全景（北東から）.....	23	43. KS-1116・1117（北西から）	
	2. 北区西壁断面（北東から）		44. KS-1107 集石遺構（南東から）	
	3. 北区北壁西側断面（南東から）		45. KS-1108・1114 溝跡（北西から）	
	4. 北区北西隅部北壁断面（南から）		46. KS-1108・1114 溝跡（南西から）	
	5. 北区南壁西側断面（北から）		47. KS-1108・1114 溝跡断面（南西から）	
	6. 北区南壁東側断面（北西から）		48. 遺跡見学会風景	
	7. KS-1076 溝跡（南から）		図版 7 出土遺物（1）.....	29
	8. KS-1076 溝跡断面（北西から）		図版 8 出土遺物（2）.....	30
図版 2	9. KS-1083 木棒（南東から）.....	24	図版 9 1. 三の丸の土壙南部の現状（北から）	43
	10. KS-1083 木棒（東から）		2. 長沼から見た三の丸の土壙（南東から）	
	11. KS-1075 岩盤を削る大きな掘り込み（南から）		3. 第 29 次調査区付近の状況（北西から）	
	12. KS-1075 岩盤を削る大きな掘り込み（南東から）		4. 第 29 次調査区全景（手前西区・奥東区：西から）	
	13. KS-1075 岩盤を削る大きな掘り込み（東から）		図版 10 5. 西区 II 層上面（近代）検出状況（西から）	
	14. KS-1075 岩盤を削る大きな掘り込み底面の加工痕跡（南西から）		6. KS-1117 遺構（南から）	
	15. KS-1075 岩盤を削る大きな掘り込み断面（南東から）		7. KS-1118 遺構（西から）	
	16. KS-1075 岩盤を削る大きな掘り込み大型闊出土状況（南から）		8. KS-1119 土坑上部（南から）	
図版 3	17. KS-1074 土坑（北東から）.....	25	9. KS-1119 土坑と断面（東から）	
	18. KS-1111 土坑（北西から）		図版 11 10. 西区断面西部（南から）.....	45
	19. KS-1112 土坑断面（北西から）		11. 西区断面東部（南から）	
	20. KS-1073 土坑断面（南東から）		12. 西区西端下部 XW 層（南から）	
	21. KS-1104・1110 土坑（北東から）		13. 西区建物壁基礎付近（東から）	
	22. KS-1110 土坑断面（南から）		14. 東区全景と土壙上面検出の土坑（南から）	
	23. KS-1078・1089・1090 検出（北西から）		図版 12 15. 東区断面（南西から）.....	46
	24. KS-1079・1080・1081・1082 検出（西から）		16. KS-1120 石組側溝検出状況（南から）	
図版 4	25. KS-1084・1085・1088 検出（北西から）.....	26	17. KS-1120 石組側溝（南から）	
	26. KS-1086・1087 石敷遺構（東から）		18. KS-1120 石組側溝西面（北東から）	
	27. KS-1086・1087 石敷遺構（南から）		19. KS-1120 石組側溝東面（西から）	
	28. KS-1087 石敷遺構（南から）		図版 13 20. 東区断面西半部（南から）.....	47
	29. KS-1077・1091・1092（南東から）		21. 東区断面西端下部（南から）	
	30. 北区東側遺構検出（南東から）		22. 東区断面東部（土壙）上半（南から）	
	31. KS-1095・1096・1097・1098（南西から）		23. 東区断面東部（土壙）下半（南から）	
	32. KS-1093・1094・1099・1100（東から）		24. KS-1123 土坑（東から）	
図版 5	33. KS-1115（西から）.....	27	25. KS-1125（南から）	
	34. KS-1102・1103（南から）		26. KS-1126 土坑（南から）	
	35. KS-1104 理士中の集積（北西から）		27. KS-1127 土坑（東から）	
	36. 南区全景（東から）		図版 14 出土遺物（1）.....	48
	37. 南区南壁断面（北から）		図版 15 出土遺物（2）.....	49
	38. 南区北壁・KS-1113 断面（南東から）			
	39. 南区西壁断面（北東から）			
	40. KS-1108・1116（西から）			
図版 6	41. KS-1108 断面（東から）.....	28		
	42. KS-1107・1108・1114（北から）			

I. はじめに

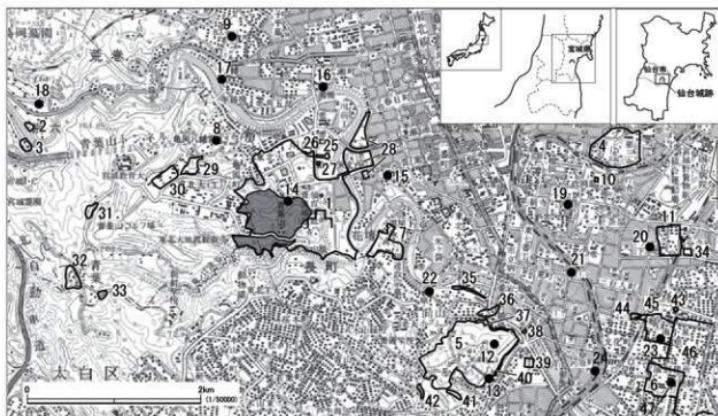
平成29年度は、国庫補助による仙台城跡遺構確認調査を下記の体制で臨んだ。

調査主体 仙台市教育委員会（生涯学習部文化財課仙台城史跡調査室）

調査担当 文化財課 課長 長島 栄一 仙台城史跡調査室長 渡部 紀

主任 鈴木 隆 主事 佐藤 恵理 文化財教諭 斎藤 健一

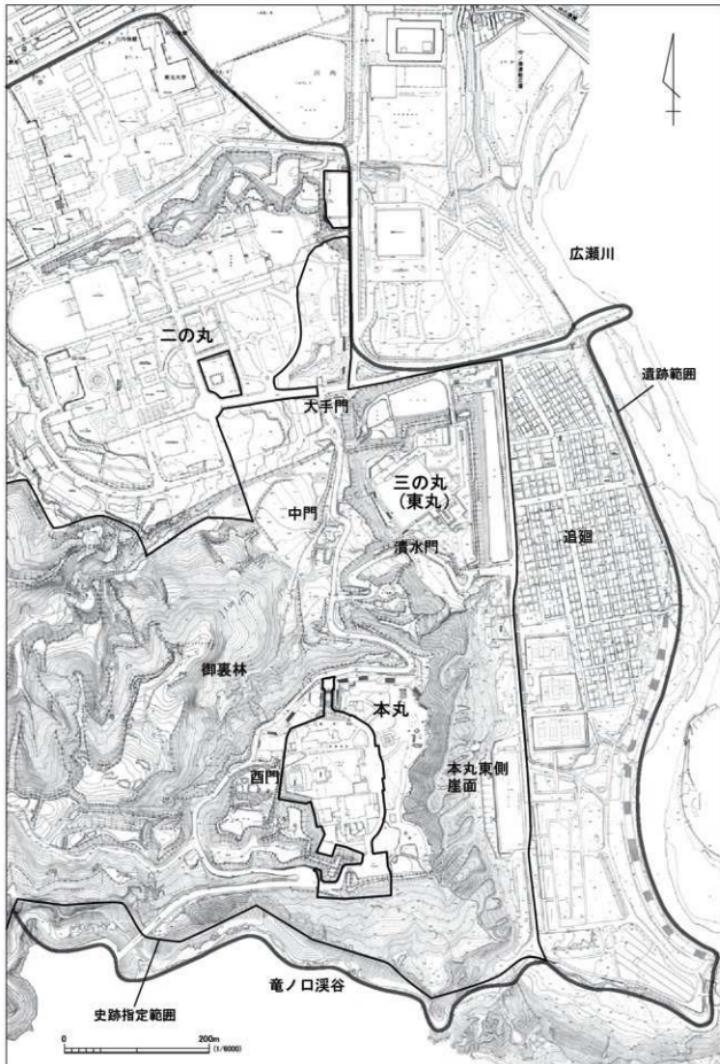
専門員 工藤 哲司 専門員 斎野 裕彦



城跡			
1 仙台城跡	15 片平仙台大神宮の板碑	31 青葉山C遺跡	
2 葛岡城跡	16 犬不動尊文永十年板碑	32 青葉山A遺跡	
3 郷六城跡	17 延元2年板碑	33 青葉山D遺跡	
4 国分郷跡	18 郷六日如来の碑	34 葉堂東遺跡	
5 茂ヶ崎城跡	19 成覚寺板碑	35 愛宕山横穴墓群A地点	
6 若林城跡	20 陸奥国分寺五輪塔	36 愛宕山横穴墓群B地点	
神社・寺院・墓所等	21 三宝荒神社板碑群	37 大年寺山横穴墓群	
7 経ヶ峯伊達家墓所	22 長徳寺板碑	38 宗祇寺横穴墓群	
8 亀岡八幡神社	23 猫塚古墳・少林神社板碑群	39 扱塚古墳	
9 大崎八幡神社	24 古城神社板碑	40 杉土手(麗除土手)	
10 三沢初子の墓など	25 川内A遺跡	41 茂ヶ崎横穴墓群	
11 陸奥国分寺跡	26 川内B遺跡	42 二ツ沢横穴墓群	
12 大年寺山伊達家墓所	27 川内C遺跡	43 法領塚古墳	
13 大年寺惣門	28 桜ヶ岡公園遺跡	44 保春院前遺跡	
板碑・石碑	29 青葉山B遺跡	45 養種園遺跡	
14 川内古碑群	30 青葉山E遺跡	46 南小泉遺跡	
		47 朝鮮ウメ	

アミカケは天然記念物青葉山

第1図 仙台城跡と周辺の遺跡



第2図 仙台城跡周辺地形図

II. 仙台城跡の概要

1. 地理的環境

仙台城跡は仙台市の中心市街地の西方にある、青葉山丘陵に位置する近世城郭である。仙台城跡は、大きく本丸・二の丸・三の丸に分かれるが、それぞれが異なる段丘面に造られている。

本丸は青葉山丘陵の高位段丘である青葉山段丘面（標高 115 ～ 138m）に位置し、その規模は正保 2 年（1645）の「奥州仙台城絵図」に「東西百三十五間、南北百四十間」とあり一間を六尺として換算すると、東西 245m、南北 267m である。本丸の南側は落差約 40m の竜ノ口渓谷、東側は広瀬川に落ちる 60m 以上の断崖に守られた天然の要害になっており、北側には二の丸が立地する。東丸と呼ばれた三の丸は本丸の北東に位置し、二の丸よりさらに一段下った仙台下町段丘上（標高 40m 程度）に立地している。各段丘面の間は段丘崖のため、比較的急峻な斜面となっている。

二の丸は、広瀬川に向かって流れる二つの沢に挟まれ、御裏林を背にした場所に位置する。東側の大手門跡付近には約 9m の高さの石垣が残り、その南側には大手門櫓が昭和 42 年（1967）に再建されている。

三の丸は外郭の北側と東側を水堀と土塁に囲まれ、南側からは本丸へと上の登城路として巽門から清水門、沢曲輪、沢門と続いている。三の丸東側のより低位の段丘面には追廻地区があり、重臣の屋敷や馬場が広がっていた。その東を流れている広瀬川の岸部分には石垣が残存している。

2. 歴史的環境

(1) 仙台城築城以前の歴史的環境

仙台城築城以前の遺跡としては、後期旧石器時代から古代にかけての遺跡である、青葉山 A ～ E 遺跡がある。特に青葉山 E 遺跡では縄文時代の遺構・遺物がまとまって出土している。また、仙台城跡二の丸に隣接する川内 A 遺跡や川内 B 遺跡からも、縄文時代の遺物が出土している。

中世の仙台城跡の周辺は信仰に関わる遺跡などが存在している。御裏林の中に弘安 10 年（1287）と正安 4 年（1302）の板碑が立つ川内古碑群がある。仙台城跡が立地する青葉山にはかつて寺院があったとする伝承があり、愛宕山の大満寺虚空蔵院は仙台城築城に伴って現在の地に移転したとされ、中世の仙台城跡周辺が宗教的な場であったことを物語っている。

伊達氏による仙台城築城以前にこの地域をおさめていた国分氏の居城「千代城」に関する 16 世紀代の文献記録では、天正年間（1573 ～ 1592）以降は廢城となたとされている。平成 10 年（1998）の本丸北壁石垣修復工事に伴う調査では、政宗の築いた仙台城とは異なる時代の虎口・堅堀・平場・通路などの遺構が検出されていることから、仙台城跡にはその前身となる中世山城が存在していた可能性が想定される。

(2) 仙台城の歴史的環境

仙台城は初代仙台藩主伊達政宗によって築かせ、幕末まで藩政の中心として維持された城である。慶長 5 年（1600）12 月 24 日に城の繩張り始めが行われ、翌年 1 月に普請が開始され、慶長 7 年（1602）5 月には一応の完成をみたとされる。築城当初の仙台城は未解明の部分が多いが、千代城の繩張りを改変したもので、それまで千代と呼ばれていたこの地を政宗が築城の際に仙台と改めたとされている。絵図や文献によれば本丸には、慶長 15 年（1610）に完成した大広間を中心とする御殿建物群が存在しており、東側の城下を見下ろす崖に造られた懸造、能舞台や書院など、上方から招いた当代一流の大工棟梁・工匠・画工等によって作られた桃山文化の集大成と言える建物群が威容を誇っていたと考えられる。

築城当初は本丸や山麓の藏屋敷（現三の丸）を中心とする城郭であり、本丸や三の丸からは政宗築城期の遺構や遺物が発見されている。築城期の本丸は現在見られる本丸の繩張りと異なっていることが明らかになっており、現在の本丸の繩張りとなるのは寛永 8 年（1668）の地震により被災した石垣の修復後と考えられる。また、西脇櫓・東脇櫓・良櫓・翼櫓などの三重の櫓は、正保 3 年（1646）4 月の地震によって倒壊したとする記事がみられ、以後再建されなかった。

後に二の丸となる山麓部には、政宗の四男である伊達宗泰や長女である五郎八姫の屋敷があったとされ、それを裏付けるような遺構や遺物が検出されている。寛永 13 年（1636）の政宗の死後、二代藩主忠宗は宗泰の屋敷があったとされている場所に二の丸の造営を開始した。それ以降はこの二の丸が藩政の中心となり、三の丸・重臣武家屋敷などが一体となって城域を形成していた。また、二の丸は貞享 4 年（1687）から元禄 13 年（1700）にかけて四代藩主綱村によって大きな改

造が行われ、仙台城の基本的な構成が完成することとなる。

二の丸よりさらに一段下った仙台下町段丘上は、東丸、後に三の丸と呼ばれるが、築城当初は政宗の私邸の屋敷があつたと考えられている。三の丸周囲には水堀と土塁がめぐり、現在も残存している。二の丸が造営された寛永年間には米蔵が置かれたと考えられる。また、政宗が酒造りをさせた屋敷が置かれた三の丸南側の翼門と清水門に隣接する平場からは、井戸跡等確認されている。

(3) 仙台城廃城後の歴史的環境

仙台城には、明治 2 年(1869) の版籍奉還を受けて二の丸に明治政府の勤政庁が置かれ、明治 4 年(1871) には東北鎮台(後に仙台鎮台) が置かれることとなった。それらの庁舎には二の丸の殿舎が利用されていたが、明治 15 年(1882) の火災によつて全て焼失した。本丸は東北鎮台の管理下に置かれ、建物群は明治の初め頃に取り壊されたようであるが、正確な年月は不明である。

明治 21 年(1888) に仙台鎮台は陸軍第二師団となり、二の丸には師団司令部が置かれる。一方で本丸には、明治 35 年(1902) に昭忠碑、明治 37 年(1904) に仙台招魂社が建立され、招魂社は昭和 14 年(1939) に宮城縣護國神社となる。

仙台城の面影を残していた中門は大正 9 年(1920) に取り壊され、国宝の大手門および脇櫓、翼門は昭和 20 年(1945) の仙台空襲によつて焼失した。現在では大手門北側の土塁が江戸時代からの姿を残す唯一の建物である。

戦後、仙台城跡は米軍の駐屯地となり、中島池などが埋め立てられるなど造成が行われた。昭和 32 年(1957) に米軍から土地が返還されると二の丸のほとんどは東北大大学が使用することとなった。三の丸には昭和 36 年(1961) に仙台市博物館が建設された。昭和 42 年(1967) には大手門脇櫓が再建されている。本丸は神社境内地となっているほかは青葉山公園として利用されている。

3. 仙台城跡の発掘調査

仙台城跡の調査は、昭和 58 年(1983) から実施されている東北大大学構内の施設整備に伴う二の丸跡の発掘調査と、仙台市博物館の改築工事に伴つて昭和 58・59 年(1983・1984) に実施された三の丸跡の発掘調査から始まる。本丸跡では小規模な試掘調査を除けば、平成 9 年(1997) の石垣修復工事に伴う発掘調査を初めとする。

本丸北壁の石垣は昭和 30 年代から変形が目立ち始め、防災上の観点から石垣修復工事が行われた。石垣の解体に伴つて発掘調査が行われ、平成 16 年度(2004) に工事を終了している。この石垣修復工事に伴う発掘調査により、現存石垣の(Ⅲ期石垣) 背面から二時期にわたる旧石垣(Ⅰ期・Ⅱ期石垣) が検出され、石垣の変遷が明らかになった。

平成 13 年(2001) からは国の補助を受け、発掘調査のほかに遺構現況調査や石垣測量などの総合調査を実施しており、平成 28 年(2016) 3 月までに 27 次にわたり調査を実施している。二の丸北部では平成 16 年より仙台高速鉄道東西線建設事業に伴う遺構の確認調査および試掘調査が行われた。

平成 15 年(2003) 5 月に三陸沖を震源とする地震により、中門跡と清水門跡の石垣の一部が被災し、平成 15 ~ 17 年(2003 ~ 05) に災害復旧工事とこれに伴う発掘調査が行われた。また、平成 23 年(2011) 3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震(東日本大震災) では本丸跡と周辺崖地、大手門脇櫓、西門、中門、清水門の石垣などが被災し、平成 23 ~ 28 年に災害復旧工事と発掘調査を行つた。

III. 発掘調査の実績と計画

平成 29 年度は、仙台城跡整備に向けて造酒屋敷跡（第 5 次）と、三の丸土壙（第 3 次）の遺構確認調査を実施した。

第 1 表 これまでの調査実績

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第 1 次	大広間跡（1 次）	185 m ²	平成 13 年 9 月 17 日～12 月 27 日
第 2 次	清水門跡付近石垣測量	210 m ² （立面）	平成 13 年 11 月 30 日～平成 14 年 2 月 13 日
第 3 次	大番士土手跡・御守殿跡・懸造跡	1,400 m ²	平成 14 年 5 月 20 日～平成 15 年 1 月 31 日
第 4 次	翼櫓跡	110 m ²	平成 14 年 5 月 20 日～8 月 31 日
第 5 次	大広間跡（2 次）	470 m ²	平成 14 年 8 月 5 日～12 月 20 日
第 6 次	仙台城跡（全城）	約 145ha	平成 15 年 5 月 7 日～8 月 8 日
第 7 次	大広間跡（3 次）	258 m ²	平成 15 年 8 月 4 日～12 月 25 日
第 8 次	登城路跡	58 m ²	平成 15 年 11 月 12 日～12 月 25 日
第 9 次	広瀬川護岸石垣測量（1 次）	50 m ² （立面）	平成 15 年 12 月 9 日～平成 16 年 2 月 5 日
第 10 次	大広間跡（4 次）	397 m ²	平成 16 年 7 月 20 日～12 月 24 日
第 11 次	登城路跡・広瀬川護岸石垣測量（2 次）	349 m ² （立面）	平成 16 年 12 月 18 日～平成 17 年 3 月 31 日
第 12 次	大広間跡（5 次）	446 m ²	平成 17 年 5 月 26 日～10 月 19 日
第 13 次	三の丸堀跡（1 次）	88 m ²	平成 17 年 11 月 1 日～12 月 22 日
第 14 次	中門北側・広瀬川護岸石垣測量（3 次）	627 m ²	平成 18 年 1 月 16 日～1 月 20 日
第 15 次	大広間跡（6 次）	311 m ²	平成 18 年 6 月 1 日～8 月 4 日
第 16 次	三の丸堀跡（2 次）	522 m ²	平成 18 年 9 月 1 日～11 月 30 日
第 17 次	大広間跡（7 次）	263 m ²	平成 19 年 5 月 28 日～8 月 3 日
第 18 次	三の丸堀跡（3 次）	463 m ²	平成 19 年 9 月 1 日～11 月 26 日
第 19 次	本丸北西壁石垣測量（1 次）	425 m ² （立面）	平成 20 年 1 月 16 日～1 月 18 日
第 20 次	大広間跡（8 次）	248 m ²	平成 20 年 5 月 8 日～7 月 31 日
第 21 次	造酒屋敷跡（1 次）	160 m ²	平成 20 年 8 月 26 日～10 月 29 日
第 22 次	本丸北西壁石垣測量（2 次）	448 m ² （立面）	平成 20 年 12 月 24 日～平成 21 年 1 月 21 日
第 23 次	造酒屋敷跡（2 次）	369 m ²	平成 21 年 7 月 1 日～11 月 12 日
第 24 次	大広間跡（9 次）	2,25 m ²	平成 21 年 12 月 14 日～12 月 15 日
第 25 次	広瀬川護岸石垣測量（4 次）	250 m ² （立面）	平成 21 年 12 月 16 日～平成 22 年 1 月 7 日
第 26 次	造酒屋敷跡（3 次）	369 m ²	平成 22 年 6 月 1 日～10 月 31 日
第 27 次	造酒屋敷跡（4 次）	173 m ²	平成 28 年 6 月 15 日～10 月 31 日

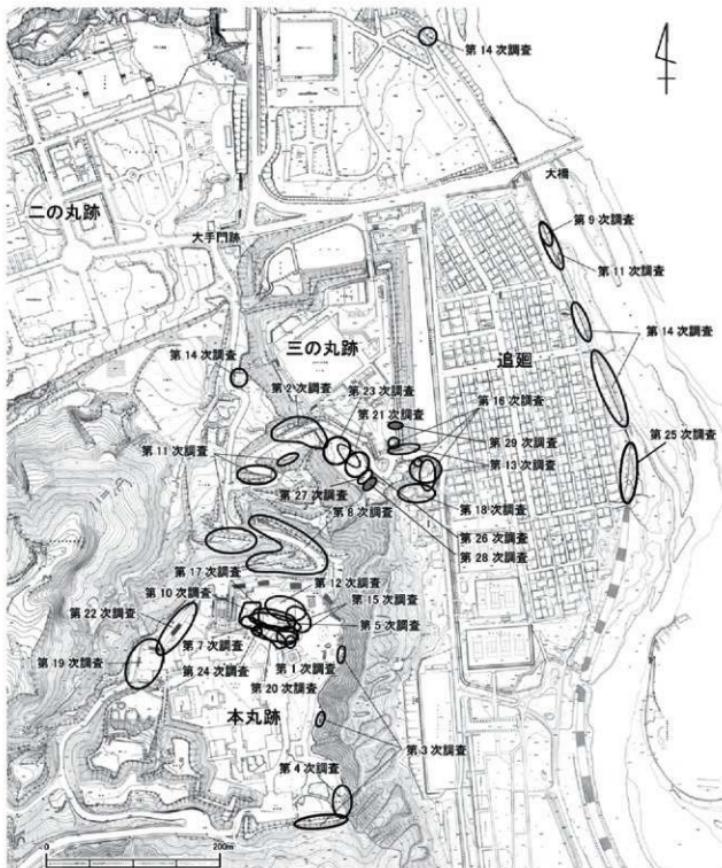
今年度実施した第 28 次調査は、平成 28 年に行った第 27 次造酒屋敷跡（4 次）調査区のすぐ南側に調査区を設定し、前回の調査に引き続き、造酒屋敷跡の遺構を確認する目的で行った。第 29 次調査は、江戸時代の土壙の形状の確認、土壙上の遺構の有無の確認などを目的として行った。

第 2 表 調査計画表と調査実績表

調査次数	調査予定地区	予定面積	調査面積	調査予定期間	調査期間
第 28 次	造酒屋敷跡（5 次）	150 m ²	110 m ²	平成 29 年 6 月 12 日～10 月 31 日	平成 29 年 7 月 5 日～11 月 15 日
第 29 次	三の丸土壙（3 次）	40 m ²	25 m ²	平成 29 年 6 月 12 日～10 月 31 日	平成 29 年 9 月 4 日～11 月 15 日

第 28 次調査では昨年度の調査に引き続き、岩盤を削る大きな掘り込みや溝跡、木枠など、様々な水の管理に関わる遺構を確認した。また、土地の造成に関わる整地層を検出した。これは築城期の仙台城の姿に迫る材料となる可能性がある。遺物は瓦、磁器、陶器、木製品、鉄製品などが出土した。

第 29 次調査では、近代の建物基礎で確認できなかった部分もあるものの、これまで部分的にしか確認していなかった土壙の積土そのものの断面で観察し、その規模や土層の特徴を明らかにすことができた。遺物はガラス、レンガ、瓦、磁器、陶器、鉄製品などが出土した。



IV. 第28次調査(造酒屋敷跡5次)

1. 調査の概要

(1) 調査目的

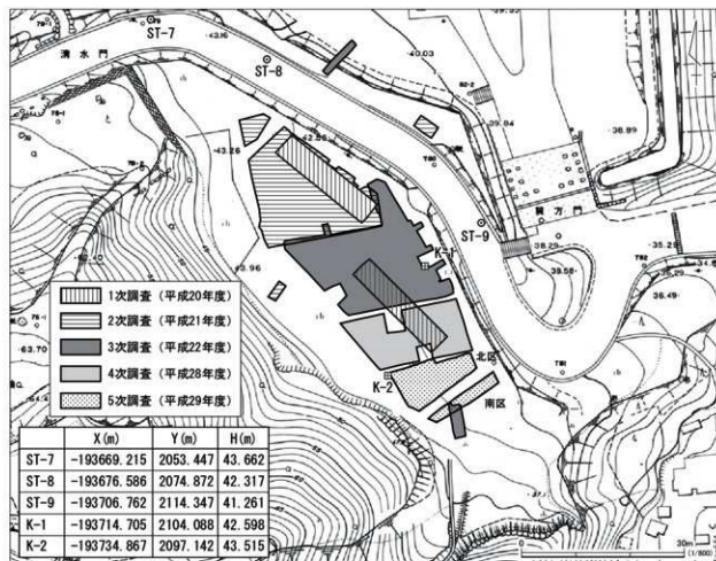
平成20年より開始された造酒屋敷跡の調査は今回で5回目となる。過去1次~4次にわたる調査により、屋敷地全体における主要施設の配置が明らかにされつつある。酒造りあるいは居住のための中心的な建物については屋敷地中央に位置し、また井戸跡やカマド跡といった造酒工程に関わるとみられる遺構は建物の北側を中心に確認されている。今回の第28次調査は、屋敷地南半部を対象としており、昨年度調査で検出された石敷遺構や水の処理に関わるとみられる遺構の拡張の確認を目的として実施した。

(2) 調査方法

今回の調査区は、4次調査区の南側約1.5m離れた箇所に設定した。調査区の面積は約110m²である。調査を開始するにあたっては、4次調査区の外側南西部に設定された基準点(K-2)を基に、5×10mグリッドを設定しその交点に木杭を設置した。調査区の設定は当初1箇所のみの予定であったが、調査対象範囲内に東西方向に延びる暗渠が確認され、これを避けるために調査区を北区と南区の2箇所に分けて設定することになった。

調査は、表土および近現代の土層を重機(平爪を装着したバックホー)により概ねIII層ないしIV層の下部まで除去したところで人力による遺構検出を行った。地点により近代以降の堆積土直下で確認される土層に違いはあるものの、概ねVII~XII層の近世整地層上面で遺構の精査を行った。遺構は、確實に近代以降のものと判断された場合は掘り込みを行い完掘した。近世遺構については、部分的な掘り込みを行い、その規模や出土遺物の有無を確認した。なお、今回、出土遺物の記録については出土遺構、層位の記録にとどめ、トータルステーションによる座標値の記録は行わなかった。

遺構の平面・断面図は、縮尺20分の1で作図した。なお、基準点の位置は平面図上に記録し後に合成できるようにし



第4図 第28次(造酒屋敷跡5次) 調査区配置図(1/800)

た。写真撮影は、デジタル一眼レフカメラを用いて行い、掘削後の全体写真については高所作業車を使用して撮影を行った。調査区の埋め戻しは、掘削した遺構を中心にその上面に不織布を敷き、調査区全体を厚さ10cm程度の山砂で覆い、その後掘削土で埋め戻して旧状に復した。

(3) 調査経過

現地調査は6月30日までに機材の準備および調査区の設定を行い、7月3日にフェンスや現地事務所を設置した。7月5日から重機による掘削を開始し、I層を除去し、その後調査を開始した。9月1日から9月27日までは土星の発掘調査のために調査を中断したが、再開後、10月5日までにII～III層を除去した。10月6日からはIII～V層を除去し、近世面の遺構検出作業と遺構の調査を併行して実施し、11月8日までに終了し、併行して平面図作製および写真撮影を行った。11月10日には調査区全景の写真撮影を行い、図面作製を終え。埋め戻しを開始した。埋め戻しは11月15日に終了し、同日中に現場事務所なども撤去して現地調査を終了した。

(4) 普及活動

普及活動として、遺跡見学会と調査成果の発表を行った。遺跡見学会は、11月4日(土)に行い、134名の参加者があった。調査成果については、12月10日(日)に宮城県考古学会主催の遺跡調査成果発表会において口頭発表した。発掘調査期間中に発掘体験の依頼を受け、仙台市立宮城野中学校の生徒15人を受け入れた。また、職場体験の一環として中学生を受け入れ、発掘作業や整理作業の体験を通じて職場体験活動に協力した。調査期間中に受け入れた中学校は5校である。(8月22～24日：仙台市立第二中学校、10月17～19日：仙台市立上杉中学校、10月23～26日：仙台市立仙台青陵中等教育学校、11月8～10日：仙台市立台原中学校、11月13～16日：仙台市立北仙台中学校)

2. 基本層序(第6・7図)

今回の調査では、大別15層、細別24層の基本層を確認した。これらは堆積の新しい順に、近代以降の堆積土層(I～VI層)、部分的で小規模な整地層(VII～X層)、大規模な整地層(XI～XIII層)、岩盤等の自然堆積土層(XIV～XV層)の4つのグループにまとめることができる。以下、グループ毎に各層の特徴について記述する。

(1) 近代以降の堆積土層(I～VI層)

I層は、暗褐色の砂質シルトで現表土層である。層厚は10～30cmで調査区全体に分布する。

II層は、灰黄褐色の砂質シルトで概ねI層の直下に位置する。層厚は10～25cmで調査区全体に分布するが、北区南半から南区においてより安定的に堆積する。なお、南区西側の一部ではI層が無くII層が最上層となっている。

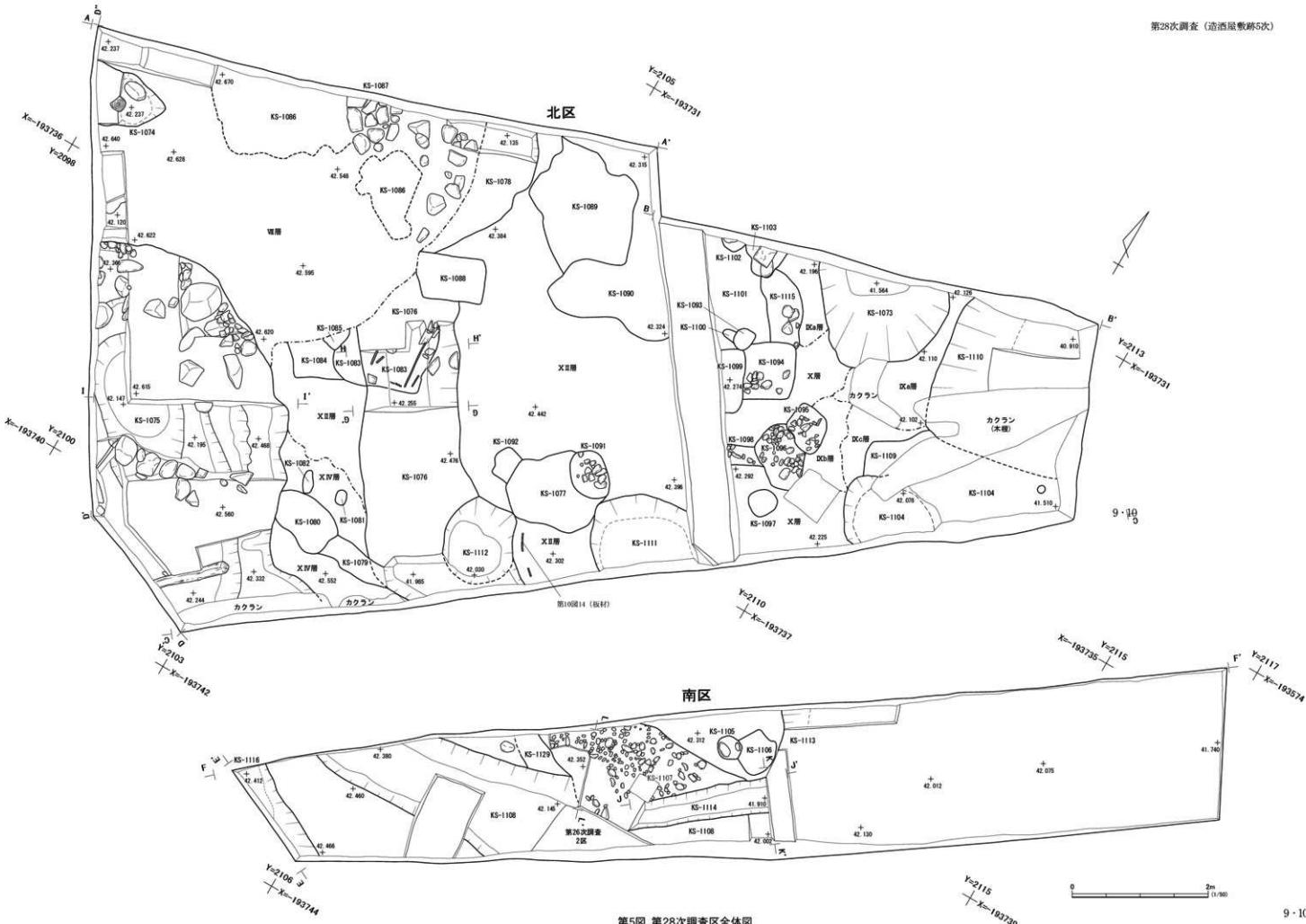
III層は、III a、III b、III c1、III c2の4層に細分した。最下層のIII c2層にビニールが含まれることから、III層は概ね太平洋戦争後の、現代の堆積土である可能性が高い。III c2層は、調査区の西側を除く全体に分布する土層で、西側にのみ残存する直下のIV層を搅拌し東に向かい緩やかに傾斜する。これより上位の土層は、基本的にこの傾斜に沿って堆積し現地表面の緩斜面を形成している。III c2層による搅拌は、耕作による可能性が考えられるが、特に北区の中央より東側では、この搅拌により近世の遺構面が破壊されたものと推定される。III a層は、この搅拌後に堆積した層厚10～20cmの灰黄褐色砂質シルトで、調査区全域に堆積している。戦後の耕作土である可能性が考えられる。

IV層は、III c2層の搅拌から免れた調査区西側でのみ確認した。層厚は20～25cmで埴炭片(炭ガラ)を多量に含んでいる。青葉山では明治期から昭和30年代まで埴炭の採掘が行われたが、IV層はこの時期の堆積土である可能性が高い。IV層以下、VI層まではガラス片は出土するもののビニール等の石油製品が見られないことから、IV層は近代のある時期から、戦後III c2層によって当該地が搅拌されるまでの間に堆積したものと考えられる。V層は、IV層が良好に残存する北区北西部を中心に確認した。黒褐色の粘土質シルト層で層厚は4～6cmと薄い。性格は、旧表土の可能性も考えられるが炭ガラ層(IV層)に浸透した雨水等の影響で、直下のVI層とIV層の中間部に形成された可能性も考えられる。なお、IV層およびVI層ではガラスを含む一定量の遺物が出土しているが、V層からは1点の遺物も出土していない。

VI層は、KS-1086・1087石敷遺構が構築された近世の遺構面を直接覆う堆積土である。にぶい黄褐色の砂質シルトで表土化していない。層厚は2～8cmと薄く、IV・V層と同様北区北西部にのみ残存する。堆積時期は、I層について多い20点のガラス片が出土(第4表)していることから概ね近代以降と考えられる。

(2) 部分的で小規模な整地層(VII～X層)

北区北西部で確認したVII・VIII層と北区東側で確認したIX・X層の2つに大別される。VII層は、層厚が5～15cmで北区



第5図 第28次調査区全体図

北西部に分布する。複数の遺構と重複関係がある。KS-1086・1087 石敷遺構はⅧ層上面に構築されている。また、KS-1076 溝跡はⅧ層より古く、KS-1075 岩削を削る大きな掘り込みはより新しい遺構である。Ⅸ層は北区北西部に設定した2箇所の深掘トレンチにおいて、断面でのみ確認した土層で平面的ななびがりは不明である。Ⅷa～Ⅷc の3層に細分した。Ⅷa 層上面は、断面観察において2～5cmの炭化物層がみられることが遺構面となる可能性がある。Ⅷ層の年代は、Ⅷc 層から19世紀代の植木鉢(写真図版7-9)が出土していることから、Ⅷ層と共に19世紀以降と考えられるが、現段階では近世期の整地層と考えられるため、19世紀前半に位置づけられる。

IX・X層は、北区東部でモザイク状に確認された小規模な整地層で、層厚はいずれも5～10cmと薄い。IX層は層相の違いによりIXa～IXc の3層に細分した。重複関係はIXa層からIXb層、IXc層、X層の順に古くなるが、いずれもXI～XIII層による大規模整地の後、この箇所での遺構が形成される前に堆積していることから、IX・X層は一連の整地層である可能性が高い。年代について、IX層から瓦片と土師質土器片が出土しているのみであるため不明である。

(3) 大規模な整地層(XI～XIII層)

今後の更なる検証が必要であるが、この3層の内、少なくとも層中から板材(第10図12)が出土したXIII層とその直上のXI層については人為的な整地層であると考えられる。特に明黄褐色シルト質粘土のXIII層は、調査区南部で岩盤(XV層)ないしその風化層(XIV層)の直上に堆積し、主に北区中央から東側の範囲に分布する整地の中心的な土層で、過去の調査区においても同様の特徴をもった土層が確認されている。XIII層は北区東部のKS-1073・1110土坑の壁面でのみ確認した明黄褐色、にぶい黄橙色の砂質シルト層で、2層に細分した。東側に傾斜しつつ堆積していると推定される。XIII層から遺物は出土していない。

(4) 岩盤等の自然堆積土層(XIV・XV層)

XIV層は、にぶい黄橙色のシルト質砂層で岩盤が風化した自然堆積土と考えられる。北区の南西部でのみ確認した。XV層は、北区南西部および南区西端部で確認した凝灰岩の岩盤で、造酒屋敷地西側の岩壁に連続する。

3. 検出遺構と遺物(第5図)

(1) 柱跡の可能性がある遺構

今回の調査で明確な建物跡は確認できなかったが、礎石状の石材や根固め石とみられる集石を伴う遺構を7基確認した。いずれも調査区中央から東側に分布するが一定間隔での配置は認められず、柱跡の可能性を指摘するにとどまる遺構である。KS-1105 南区中央のXII層上面において確認した。重複関係はKS-1106より新しい。平面形は円形で規模は、径33cmである。長径25cmの平坦な河原石を伴っており礎石の可能性がある。出土遺物はない。

KS-1091 北区中央のXII層上面において確認した。重複関係はKS-1077より新しい。平面形は梢円形で規模は長軸72cm、短軸54cmである。根固め状の集石が認められた。出土遺物はない。

KS-1092 北区中央南寄りのXII層上面において確認した。重複関係はKS-1077より古い。平面形は不整形で、規模は長軸45cm、短軸36cmある。根固め状の集石が認められることから柱跡の可能性がある。出土遺物がないため遺構の時期は不明である。

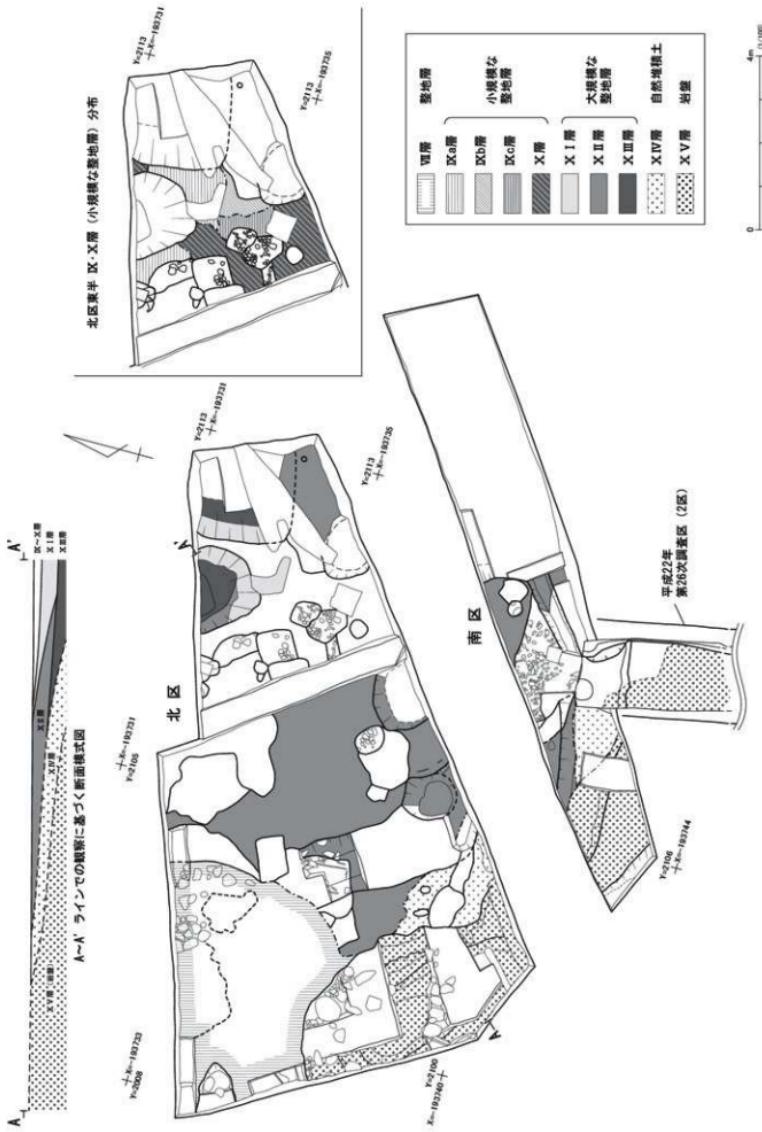
KS-1094 北区東側のX層上面において確認した。重複関係はKS-1101・1115より新しく、KS-1093・1099より古い。平面形は方形を呈する。規模は、長軸86cm、短軸72cmである。出土遺物はない。なお、本遺構については、堆積土中に円錐を一定程度含んでおり根固めの可能性も考えられる。

KS-1095 北区東側のX層上面において確認した。重複関係はKS-1096より新しい。平面形は不整な梢円形で、規模は長軸78cm、短軸60cmである。根固め状の集石が認められることから柱跡の可能性がある。遺物は瓦片7点、鉄釘1点(第10図9)が出土したが、遺構の時期は不明である。

KS-1096 北区東側のX層上面において確認した。重複関係はKS-1098より新しくKS-1095より古い。平面形は不整な梢円形で、規模は長軸94cm、短軸76cmである。根固め状の集石が認められることから柱跡の可能性がある。出土遺物がないため遺構の時期は不明である。

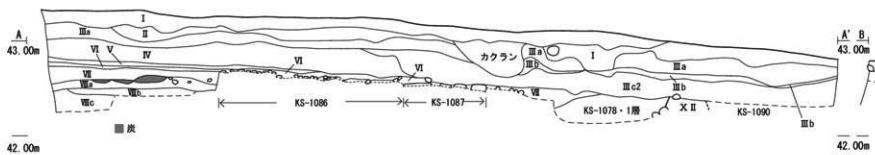
KS-1103 北区東側のIXa層上面において確認した。北側は調査区外に延びる。重複関係はKS-1101・1115より新しい。平面形は不明で、規模は残存範囲で長軸62cm、短軸42cmである。長径25cm以上の平坦な河原石があり礎石の可能性がある。なお、この直上で確認された方形ないし長方形に加工された切石は、本遺構の埋土中には入っておらず、切石自体が基本層II層に覆われることから、本遺構に伴う礎石となる可能性は低いと考えられる。出土遺物はない。

第28次調查(造酒屋敷跡5次)



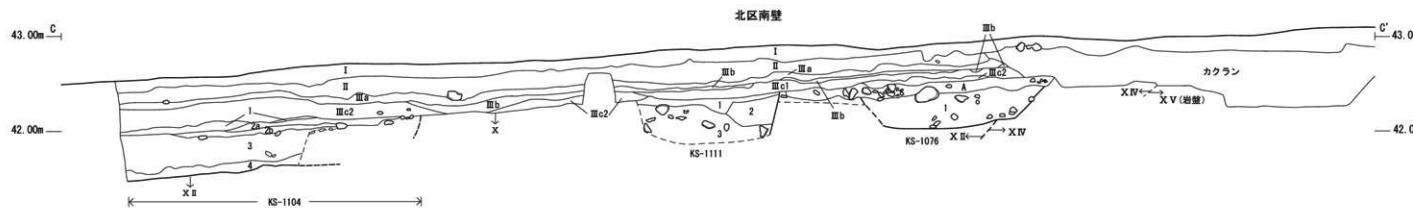
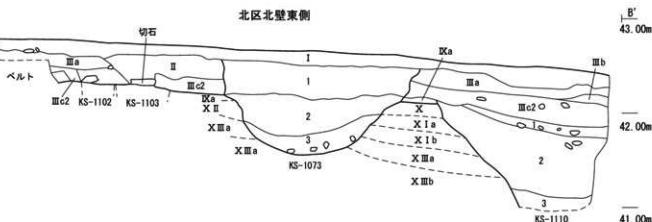
第6図 第28次調査区の岩盤・整地層分布図

北区北壁西侧

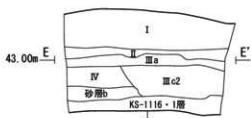


第28次調査 (造酒屋敷跡5次)

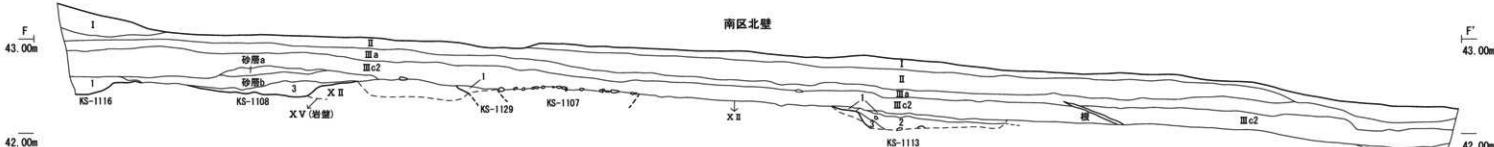
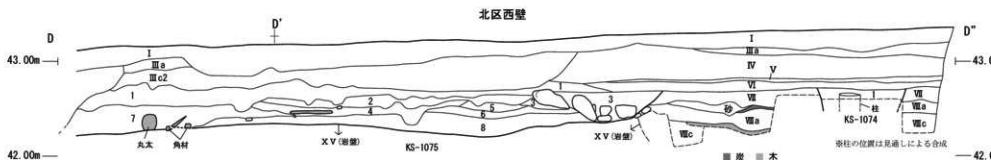
北区北壁東側



南区西壁



北区西壁

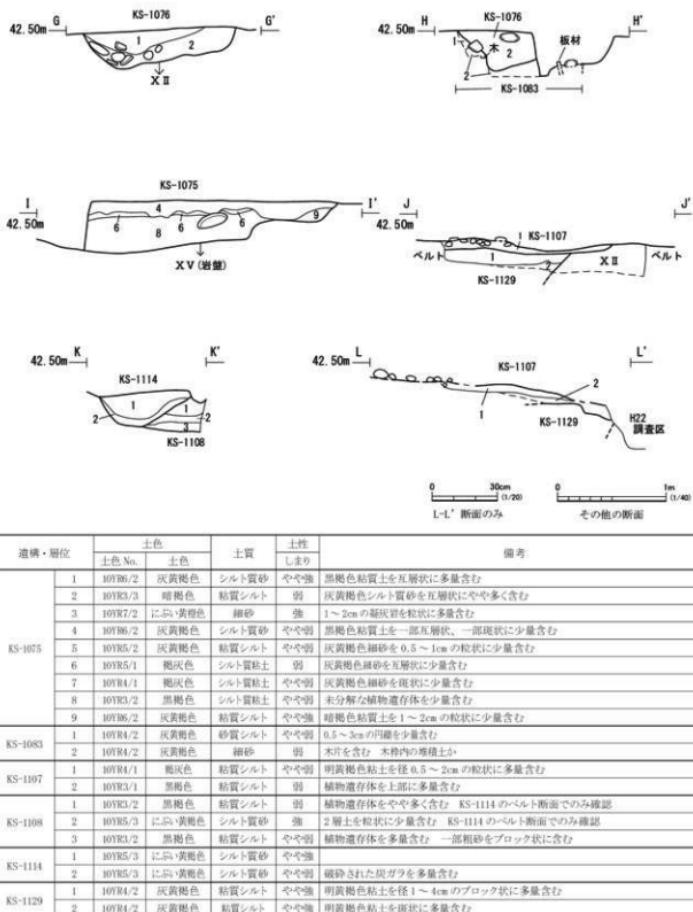


第7図 第28次調査区土層断面図

0 2m (1:400)

第3表 第28次調査土層注記表

造構・層位	土色		土質 しまり	土性 しりま	現表土	備考	
	土色No.	土色					
基本層 (古以降 堆積土)	I	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	弱	現表土	
	II	10YR4/2	灰黃褐色	砂質シルト	やや強	風化凝灰岩の砂を10~20cmのブロック状に多量含む(基本の土色IVと層同じ)	
	IIIa	10YR4/2	灰黃褐色	砂質シルト	やや強	0.5~1cmの風化物をやや多く含む、調査区全体(北区、南区)に分布、ビニール含む	
	IIIb	10YR2/3	黒褐色	砂質シルト	やや強	炭ガラを多量含む(炭ガラ)	
	IIIc1	10YR4/2	灰黃褐色	砂質シルト	やや強	IIIaと同じ、北区南部でカルク確認	
	IIIc2	10YR2/3	黒褐色	砂質シルト	やや強	にい・黄褐色シルト質砂をブロック状に多量含む、ビニール含む IV層を押す土層	
	IV	10YR2/3	黒褐色	砂質シルト	やや強	炭ガラを多量含む、北区北西部に分布	
部分的な 整地層	V	10YR2/2	黒褐色	粘質シルト	弱	IV層直下に分布、北区北西部のみ分布	
	VI	10YR4/3	にい・黃褐色	砂質シルト	やや強	V層直下、北区北西部にのみ分布、有筋道構(KS-1086)を覆う土層、ガラス含む	
	VII	10YR5/3	にい・黃褐色	シルト質砂	強	上部に明黄色粘質土を3~5cmのブロック状に含む、0.1~0.3cmの凝灰岩粒をやや多く含む	
	VIIIa	10YR4/3	にい・黃褐色	砂質シルト	強	上面に風化物あり(B西北角サブレ断面で確認) 0.1~0.3cmの凝灰岩粒をやや多く含む	
	VIIIb	10YR5/3	にい・黃褐色	粗砂	強		
	VIIIc	10YR5/3	にい・黃褐色	砂質シルト	強	0.5~1cmの円礫をやや多く含む	
	IXa	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	強	0.1~0.5cmの凝灰岩粒を多量含む、3~5cmの円礫をやや多く含む	
大規模な 整地層	IXb	10YR4/1	褐灰色	砂質シルト	強	黄褐色粘質土を1~4cmのブロック状に多量含む	
	IXc	10YR4/1	褐灰色	砂質シルト	強	褐灰色粘質土を0.5~1cmの粒状にやや多く含む	
	X	10YR3/3	にい・黃褐色	粘質シルト	強	0.5~1cmの凝灰岩粒を多量、3~10cmの円礫をやや多く含む	
	XIa	10YR5/8	明黄色	砂質シルト	強	0.5~1cmの凝灰岩粒を多量、3~20cmの円礫をやや多く含む	
	XIb	10YR5/8	黃褐色	砂質シルト	強	0.5~1cmの凝灰岩粒をやや多く含む	
	XII	10YR7/6	明黃褐色	シルト質砂	強	5~20cmの円礫をやや多く含む、今回調査区内広域に分布 板材出土	
	XIII	10YR6/6	明黃褐色	砂質シルト	強	0.5~2cmの凝灰岩粒を多量含む	
割裂等	XIVa	10YR7/4	にい・黃褐色	砂質シルト	強	0.2~1cmの凝灰岩粒をやや多く含む	
	XIVb	10YR7/2	にい・黃褐色	シルト質砂	強	岩盤が風化した自然堆積物	
	XV	10YR7/1	灰白色	岩盤	強	岩盤	
	1	10YR4/2	灰黃褐色	砂質シルト	やや強	0.5~2cmの凝灰岩粒をやや多く含む	
	2	10YR5/2	灰黃褐色	砂質シルト	強	0.5~2cmの凝灰岩粒、炭化物粒をやや多く含む	
	3	10YR5/2	灰黃褐色	砂質シルト	強	1~5cmの円礫を少量含む	
	KS-1074	1	10YR5/2	灰黃褐色	粘質シルト	強	炭灰岩を1~2cmの粒状にやや多く含む
KS-1073	1	10YR5/2	暗褐色	シルト質砂	やや強	黒褐色粘質土を互層間に多量含む	
	2	10YR5/2	灰黃褐色	シルト質砂	強	炭灰岩を互層間に多量含む	
	3	10YR5/2	灰黃褐色	砂質シルト	強	0.5~2cmの凝灰岩粒、炭化物粒をやや多く含む	
	4	10YR5/2	灰黃褐色	シルト質砂	やや弱	黒褐色粘質土を一部互層状、一部斑状に少量含む	
	5	10YR5/2	灰黃褐色	粘質シルト	やや弱	炭灰岩細胞を0.5~1cm粒状に少量含む	
	6	10YR5/1	褐灰色	シルト質粘土	弱	炭灰岩細胞を互層間に少量含む	
	7	10YR4/1	褐灰色	シルト質粘土	やや弱	炭灰岩細胞を互層間に少量含む	
	8	10YR4/2	黑褐色	シルト質粘土	やや弱	太分解した鰐遺存体を少量含む	
	9	10YR5/2	灰黃褐色	粘質シルト	やや強	明黄色粘質土を0.5~1cmの粒状に少量含む 灰円錐 多量含む	
KS-1076	1	10YR4/2	灰黃褐色	砂質シルト	やや強	明黄色粘質土を0.5~1cmの粒状に多量含む 灰円錐 多量含む	
	2	10YR5/3	にい・黃褐色	シルト質砂	やや強	5~20cmの円礫をやや多く含む、瓦、多量含む	
	3	10YR4/1	褐灰色	砂質シルト	やや強	3~10cmの円礫をやや多く含む	
	4	10YR4/1	褐灰色	砂質シルト	やや弱	5~15cmの風化凝灰岩粒を多量含む	
	5	10YR5/2	灰黃褐色	粘質シルト	やや弱	炭灰岩細胞を0.5~1cm粒状に少量含む	
	6	10YR5/1	褐灰色	シルト質粘土	弱	炭灰岩細胞を互層間に少量含む	
	7	10YR4/1	褐灰色	シルト質粘土	やや弱	炭灰岩細胞を互層間に少量含む	
KS-1075	8	10YR5/2	黑褐色	シルト質粘土	やや弱	太分解した鰐遺存体を少量含む	
	9	10YR5/2	灰黃褐色	粘質シルト	やや強	明黄色粘質土を1~2cmの粒状に少量含む	
	10	10YR4/2	灰黃褐色	砂質シルト	やや強	炭灰岩細胞を0.5~1cm粒状に少量含む	
	11	10YR5/3	にい・黃褐色	シルト質砂	強	炭灰岩細胞を互層間に多量含む	
	12	10YR5/2	にい・黃褐色	粘質シルト	強	1~2cmの凝灰岩粒を互層間に少量含む	
	13	10YR5/2	灰黃褐色	シルト質砂	強	0.5~2cmの凝灰岩粒を互層間に少量含む	
	14	10YR5/2	灰黃褐色	砂質シルト	強	0.5~2cmの凝灰岩粒を互層間に少量含む	
KS-1087	1	10YR4/1	にい・黃褐色	砂質シルト	やや強	明黄色粘質土を0.5~1cmの粒状に多量含む 灰円錐 多量含む	
	2	10YR5/2	にい・黃褐色	シルト質砂	強	5~20cmの円礫をやや多く含む、瓦、多量含む	
	3	10YR4/1	褐灰色	砂質シルト	やや強	3~10cmの円礫をやや多く含む	
	4	10YR4/1	褐灰色	砂質シルト	やや弱	5~15cmの風化凝灰岩粒を多量含む	
	5	10YR5/2	灰黃褐色	粘質シルト	やや弱	炭灰岩細胞を0.5~1cm粒状に少量含む	
	6	10YR5/1	褐灰色	シルト質粘土	弱	炭灰岩細胞を互層間に少量含む	
	7	10YR4/1	褐灰色	シルト質粘土	やや弱	炭灰岩細胞を互層間に少量含む	
KS-1104	8	10YR5/2	灰黃褐色	シルト質粘土	やや弱	太分解した鰐遺存体を少量含む	
	9	10YR5/2	灰黃褐色	粘質シルト	やや強	明黄色粘質土を1~2cmの粒状に少量含む	
	10	10YR4/2	灰黃褐色	砂質シルト	強	3~20cmの円礫を多量含む	
	11	10YR4/2	にい・黃褐色	砂質シルト	やや強	植物遺存体をやや多く含む KS-1114のベルト断面でのみ確認	
	12a	10YR7/2	にい・黃褐色	粘質シルト	やや強	2層土を粒状に少量含む KS-1114のベルト断面でのみ確認	
	12b	10YR5/2	灰黃褐色	粘質シルト	やや強	植物遺存体を多量含む 一部粗砂をブロック状に含む	
	13	10YR4/1	褐灰色	砂質シルト	弱	3~20cmの円礫を多量含む	
KS-1108	14	10YR4/4	にい・黃褐色	砂質シルト	やや強	植物遺存体をやや多く含む KS-1114のベルト断面でのみ確認	
	15	10YR6/4	にい・黃褐色	砂質シルト	強	5~15cmの風化砂岩ブロックを多量含む 上面硬化 (KS-1109の1層と同)	
	16	10YR5/2	灰黃褐色	粘質シルト	強	0.5~1cmの凝灰岩粒をやや多く含む 3~5cmの円礫をやや多く含む	
	17	10YR5/2	灰黃褐色	砂質シルト	強	0.5~1cmの凝灰岩粒をやや多く含む 3~5cmの円礫をやや多く含む	
	18	10YR5/2	灰黃褐色	シルト質砂	強	1~30cmの円礫を多量含む	
	19	10YR5/3	にい・黃褐色	シルト質砂	強	1~30cmの円礫を多量含む	
	20	10YR5/3	にい・黃褐色	粘質シルト	強	1~30cmの円礫を多量含む	
KS-1111	21	10YR6/2	灰黃褐色	砂質シルト	やや強	1~30cmの円礫を多量含む 部分的に互層を多量含む	
	22	10YR5/3	にい・黃褐色	シルト質砂	強	3~20cmの円礫を多量含む	
	23	10YR5/2	灰黃褐色	粘質シルト	強	3~20cmの円礫を多量含む	
	24	10YR5/2	灰黃褐色	砂質シルト	強	3~20cmの円礫を多量含む	
	25	10YR5/2	灰黃褐色	シルト質砂	強	3~20cmの円礫を多量含む	
	26	10YR5/2	灰黃褐色	粘質シルト	強	3~20cmの円礫を多量含む	
	27	10YR5/2	灰黃褐色	砂質シルト	強	3~20cmの円礫を多量含む	
KS-1113	28	10YR4/1	褐灰色	砂質シルト	弱	黄褐色粘質シルトを揉1~5cmのブロック状に多量含む	
	29	10YR4/2	褐灰色	砂質シルト	弱	黄褐色粘質シルトを粒状に揉1~5cmのブロック状に多量含む	
	30	10YR5/3	にい・黃褐色	砂質シルト	弱	黄褐色粘質シルトを揉1~5cmのブロック状に多量含む	
	31	10YR5/3	にい・黃褐色	砂質シルト	強	1~5cmの凝灰岩粒を揉1~5cmのブロック状に多量含む	
	32	10YR5/3	にい・黃褐色	シルト質砂	強	1~5cmの凝灰岩粒を揉1~5cmのブロック状に多量含む	
	33	10YR5/3	にい・黃褐色	粘質シルト	強	1~5cmの凝灰岩粒を揉1~5cmのブロック状に多量含む	
	34	10YR5/3	にい・黃褐色	砂質シルト	強	1~5cmの凝灰岩粒を揉1~5cmのブロック状に多量含む	
KS-1116	35	10YR5/3	暗褐色	砂質シルト	やや弱	にい・黄褐色粗砂を揉1~5cmのブロック状に多量含む	
	36	10YR5/3	にい・黃褐色	砂質シルト	強	プロック状1~20cmを多量含む	
	37	10YR5/3	にい・黃褐色	砂質シルト	強	3~30cmの円礫を多量含む	
	38	10YR5/3	にい・黃褐色	シルト質砂	やや弱	黄褐色粘質土を粒状に揉1~5cmのブロック状に多量含む	
	39	10YR5/3	にい・黃褐色	粗砂	やや弱	上面により揉い砂厚い	
	40	10YR5/3	にい・黃褐色	粗砂	やや弱	上面により揉い砂厚い	
	41	10YR5/3	にい・黃褐色	粗砂	やや弱	上面により揉い砂厚い	
その他	42	砂礫n	10YR5/3	にい・黃褐色	シルト質砂	弱	
	43	砂礫n	10YR5/3	にい・黃褐色	粗砂	やや弱	
	44	砂礫n	10YR5/3	にい・黃褐色	粗砂	やや弱	上面により揉い砂厚い

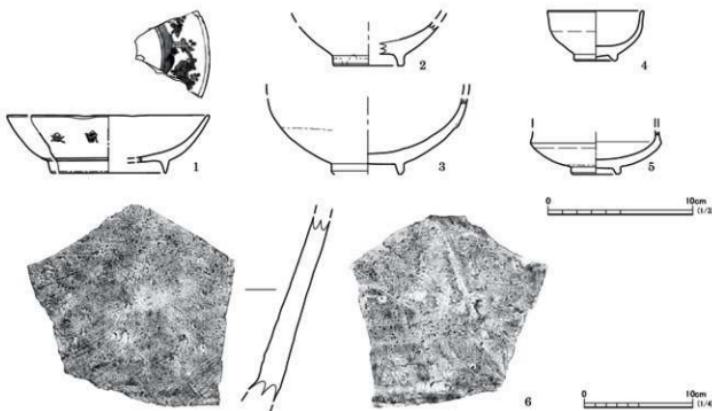


第8図 第28次検出遺構断面図

(2) 溝跡

8条の溝跡を確認した。特に、北区南西部から南区西侧において確認した重複する複数の溝跡は、西から東に向かって緩やかに傾斜していることから、屋敷地南端部における排水等に関わる遺構である可能性が考えられる。

KS-1076 北区西側で検出した南北方向に延びる溝跡である。XII層上面で確認した。部分的に底面まで堆積土の掘り込みを行った。延長方向はN=33°Wだが、北区南端部で「く」の字に屈曲し北区調査区外へ南東方向に延びる。重複関係はKS-1083より新しく、KS-1079・1088・1107・1108・1112・1114より古い。規模は上端幅140~160cm、下端幅50



図中番号	遺物番号	種別	種類	層位・遺構	生産地	器種	製作年代	法量 (mm)	釉薬・文様等	備考	写真回数
1	041	磁器	染付	IV	肥前	皿	18c後半～19c前半	口径 (140) 底径 (80) 器高 40	松竹梅文か		1
2	067	陶器	-	KS-1109・I	大堀相馬	碗	19c 前半	口径 (-) 底径 (49) 器高 (30)	黒釉	2	
3	093	陶器	-	VII b	大堀相馬	平碗	18c	口径 (-) 底径 (50) 器高 (52)	かけたびき	7	
4	098	陶器	-	KS-1075 西面	大堀相馬	小坪	18c 後半	口径 66 底径 30 器高 34	灰釉	3	
5	131	陶器	-	KS-1075 堆積土	小野相馬か・横折れ瓶	横折れ瓶	19c 初頭か	口径 (-) 底径 (34) 器高 (30)		5	
6	135	陶器	-	KS-1076・2	備前	大甕	17c	口径 (-) 底径 (-) 器高 115 ~		12	
写	005	陶器	-	VI	南戸美濃	輪花鉢	18c	口径 (-) 底径 (-) 器高 (-)	鉄鉢 紅葉文	4	
写	054	陶器	-	KS-1110・2	大堀相馬	香炉	18c	口径 (160) 底径 (-) 器高 (45)		6	
写	080	陶器	-	III c2	大堀相馬	土瓶	19c 前	口径 (-) 底径 (-) 器高 (-)	黒釉	8	
写	090	陶器	-	VII c	不明	植木鉢	19c	口径 (-) 底径 (160) 器高 (-)	鉄鉢	9	
写	101	陶器	-	KS-1075・8	在地	鉢	19c 前葉～中葉	口径 (-) 底径 (-) 器高 (-)	刷毛目文	11	
写	126	陶器	-	I	不明	甕	18c ~ 19c	口径 (-) 底径 (260) 器高 (90)		10	

参考: 写真的な掲載

第9図 第28次調査出土遺物(1)

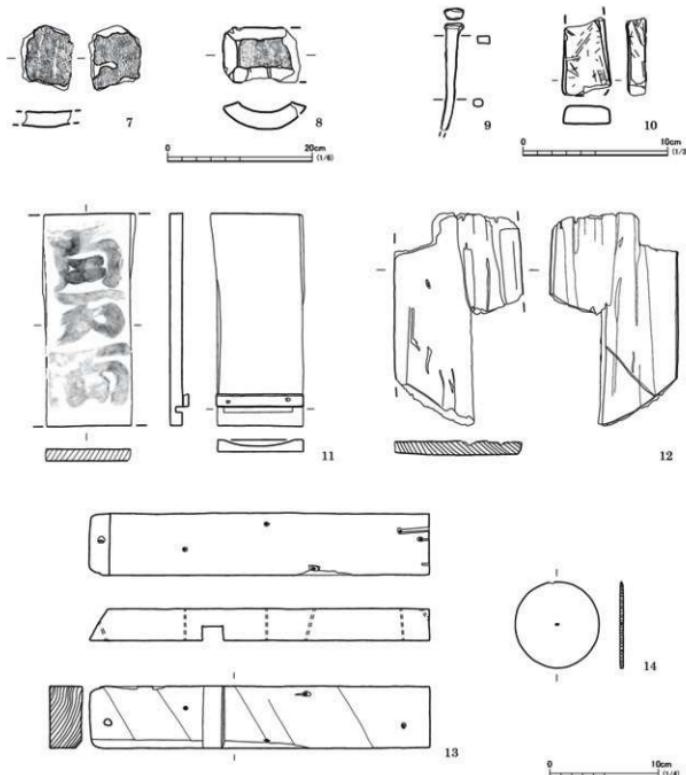
~60cm、深さ40cmである。延長は、北区の確認範囲では約5mである。なお、南区で確認したKS-1129は、その方向と堆積土の特徴から本溝跡から連続する遺構である可能性が高い。KS-1129も一連の遺構とした場合の総延長は10m以上となる。堆積土は2層に分かれる。底面付近にも自然堆積の特徴は無く、掘削後比較的短期間に内に人為的に埋められた可能性が高い。堆積土中に多量の円錐と瓦片を含むことから、暗渠の機能を果たした溝跡であると推定される。

遺物は162点の瓦片のほか、17世紀代の備前産大甕の体部片が1点出土した(第9図6)。また、本遺構を覆うVII層は19世紀前半の整地層であることから、本遺構の年代はそれ以前に位置づけられる。

KS-1079 北区西側のXIV層上面において平面でのみ確認した。重複関係はKS-1076より新しく、KS-1080より古い。規模は、幅35cm、延長104cmである。出土遺物がないため遺構の時期は不明である。

KS-1098 北区東側のX層上面において平面でのみ確認した。東西方向に延びるが、北区西側では確認できない。重複関係はKS-1096より古い。規模は幅28cm、延長40cm以上である。出土遺物はない。

KS-1107 南区中央のXII層上面で確認した。堆積土1層上面に集石(径3~15cmの円錐)がみられる。北側は調査区外へ延びる。重複関係はKS-1129・1108より新しく、KS-1114より古い。規模は、幅140~200cm、深さ20cm以上である。直上にIII c2層が堆積しており、集石の間からビニール等が出土した。遺構上面はIII c2層の堆積時に搅拌を受けていると



図中 番号	遺物 番号	種別	種類	層位・遺構	文様	製作年代	法量 (mm)	重量(g)	備考	写真 図版
7	087	瓦	平瓦	KS-1075・8	-	古代	面幅(70) 裏幅(70) 長さ(96) 高さ(22) 厚み(21)	470	内面:面目、外面:調目叩き	13
8	133	瓦	面戸瓦	KS-1076・2	-	-	幅105～長さ26 高さ(37) 厚み23	210		14
9	196	金属製品	角針	KS-1095	-	-	長さ74 幅12.2 厚さ8.8	12.33		16
10	035	石製品	砾石	IV	-	-	全長54～ 幅32 厚み12	38		20
11	242	木製品	板材	IV	-	-	長さ(197) 幅(85) 厚み11	195	墨書き「百万両」 薄か	22
12	239	木製品	板材	XII	-	-	長さ(196) 幅(128) 厚み13	125	2点接着	24
13	240	木製品	角材	KS-1075・7	-	-	長さ313 幅56 厚み30	535	切り込みあり	23
14	238	木製品	板材	KS-1075底面	-	-	直径7.9 厚み2.5	15	有孔円板	21
写	024	瓦	軒丸	VI	三巴文	17c.±	瓦当径(160) 内径(120)	84	(はなれ軒)	15
写	192	金属製品	弾丸	KS-1075・1	-	-	長さ15.7 � 徑8.4	8.07	半球形の弾丸	17
写	195	金属製品	鉛錠	KS-1075・3	-	-	長さ(50.4) 徑11.6	8.77		18
写	197	金属製品	鉛錠	KS-1104	-	-	長さ(14.9) 径12.1	2.76		19
写	241	木製品	角材	KS-1075・7	-	-	長さ(322) 幅(52) 厚み(30)	545	接りあり	25

参考: 写真のみ掲載

第10図 第28次調査出土遺物(2)

考えられる。堆積土からの出土遺物がないため遺構の時期は不明であるが、炭ガラを多量に含むKS-1114より古いことから、近代あるいはそれ以前の遺構と考えられる。

KS-1108 南区西側のXII層上面で確認した。東西方向に延び、北側はKS-1075に接続するとみられる。南側は調査区外に延びる。重複関係はKS-1129より新しく、KS-1107・1114より古い。KS-1075と同様に岩盤を掘り込んでつくられた遺構である。規模は、上端幅120～150cm、下端幅60～100cm、延長5.5m以上、深さ15～20cmである。堆積土は3層に分かれ。遺物は近世期の磁器皿1点、平瓦片1点が出土した。遺構の年代は、後述するKS-1075と同様に19世紀前半と考えられる。

KS-1114 南区中央のXII層上面で確認した。南西から北西方向に延びる溝跡である。西側の延長部分は今回の調査範囲内では確認できず、東側はKS-1113あるいはその他の遺構によって切られている可能性がある。重複関係はKS-1107・1108より新しい。規模は幅40～50cm、延長200cm以上、深さ30cmである。堆積土は3層に分かれ。出土遺物はないが、細かく破碎された炭ガラが多量に含まれることから近代以降の溝跡と考えられる。

KS-1116 南区西端のXV層(岩盤)上面で確認した。岩盤を掘り込んでつくられた北西から南東方向に延びる溝跡である。規模は幅43cm以上、延長162cm以上、深さ12cm以上である。堆積土は1層である。遺物は丸瓦片2点、木製品2点(角材、柿材?)が出土した。本溝跡については、その方向から平成22年度に実施した第26次調査2区で確認されたKS-1004と一連のものである可能性が高い。KS-1004についても造酒屋敷の南側を区画する施設である可能性が指摘されている(仙台城跡II)。

KS-1129 南区中央のXII層上面で確認した。KS-1114の底面においても確認され、北西から南東方向に延びる溝跡と推定される。重複関係はKS-1108-1107-1114より古く、南区で最も古い遺構である。規模は、幅150cm、延長200cm以上、深さ25cm以上である。堆積土は2層に分かれ。出土遺物はない。本遺構については、その位置関係と堆積土の特徴から、北区のKS-1076と一連のものである可能性が高い。年代も同様と考えられる。

(3) 岩盤を削る大きな掘り込み

KS-1075 北区南西部のVII層上面で確認した。西側は調査区外に延びる。重複関係はKS-1080より新しい。平面形は梢円形を呈すと推定される。規模は、長軸586cm以上、短軸302cm以上、深さ46cmである。確認範囲では、底面は全て岩盤である。断面形は、全体的に皿状を呈するが、東側の立ち上がり部分に2段のテラスが認められる。各段の斜面では岩盤掘削時の加工痕跡とみられる凹凸が顕著である(図版2-14)。一方、その他の平坦面においては凹凸が認められず、粗い掘削後に仕上げ加工が施されたものと考えられる。堆積土は9層に分かれ。1～4層はガラスや統弾等を含む近代以降の堆積土である。1-2層は互層状の特徴をもつ自然堆積土である。3層には人頭大の大型躰が多量含まれており、本遺構がある程度埋没した段階で人為的に投棄されたものと考えられる。5～9層は、水中で自然に堆積した近世期の土層と考えられる。

遺物は、磁器が6点、陶器8点、瓦21点、金属製品1点、石製品1点、木製品19点、ガラス4点、自然遺体2点(昆虫、種子)が出土した。この内年代を示す遺物として、底面から出土した18世紀後半の大堀相馬産小坪(第9図4)と8層から出土した19世紀前半の在地産陶器鉢(図版7-11)を掲載した。

(4) 土坑

14基の土坑を確認した。

KS-1073 北区東側で確認した。掘り込み面はII層上面である。北側は調査区外に延びる。平面形は不明である。重複関係はない。規模は東西196cm、南北154cm以上、深さ64cm以上である。堆積土は3層に分かれ。遺物は陶器1点、土師質土器1点、瓦12点が出土した。本遺構の時期は掘り込み面から近代以降と考えられる。

KS-1074 北区西側で確認した。掘り込み面はVII層上面である。西側は調査区外に延びる。平面形は不明である。規模は長軸112cm以上、短軸84cm、深さ30cm以上である。堆積土よりガラスが出土していることから、近代以降の遺構と考えられる。また、堆積土より径23cmの上端を切断された柱が直立して出土した。

KS-1077 北区西側のXII層上面において平面でのみ確認した。重複関係はKS-1092より新しく、KS-1091より古い。平面形は不整な梢円形を呈する。規模は長軸140cm、短軸118cmである。小円窓を多量含み、根固めの可能性もあるが、その規模の大きさから土坑とした。遺物は瓦9点、木製品1点が出土した。

KS-1078 北区西側のXII層上面で確認した。北側は調査区外に延びる。KS-1088より古い。遺構の西側をVII層に覆われるため平面形は不明である。長軸214cm以上、短軸86cm以上、深さ26cm以上である。堆積土は1層のみ確認した。

第4表 第28次調査出土遺物集計表

層位・遺構	磁器	陶器	土師質土器	瓦質土器	瓦	金属製品	石製品	木製品	ガラス	動植物遺体	その他	総計
I	37	22	1		50				93		12	215
I~III c2	2				2							4
III b	1											1
III c	5	3	1		1				2		2	14
III c1	1				3				1			5
III c2	25	8	4		141			1	19		5	203
III c2~IV					2							2
IV	6	5	2		8		1	1	4			27
V	13	8			26	2			20		1	70
VII	1			1	1						1	4
VII上面	1	1										2
VII	1			3	4				3			11
VII b	1											1
VII c	1	1										2
IX a			1		8							9
IX b					1							1
X II								1				1
KS-1073	1	1			12							14
KS-1074				1	9				1			11
KS-1075	6	8			21	4	1	19	4	2		65
KS-1076	1				162							163
KS-1077					9				1			10
KS-1078	1				1							2
KS-1084					2							2
KS-1095					7	1						8
KS-1108	1				1							2
KS-1109	1	8	1		12	1						23
KS-1110	6	15			24				3	1	1	50
KS-1111					6				10			16
KS-1112					16				16			32
KS-1113	1				5		1					7
KS-1116					2				2			4
カクラン					7							7
その他	1				3	1			2			7
総計	106	87	14	2	546	9	3	56	147	3	22	995

遺物は、陶器1点、瓦1点が出土したが年代は不明である。ただしVII層の直下にあることから19世紀前半以前の遺構と考えられる。

KS-1080 北区西側のXIV層上面において平面でのみ確認した。重複関係はKS-1075より古く、KS-1079より新しい。平面形は不整な橢円形を呈する。規模は長軸96cm、短軸67cmである。出土遺物はない。

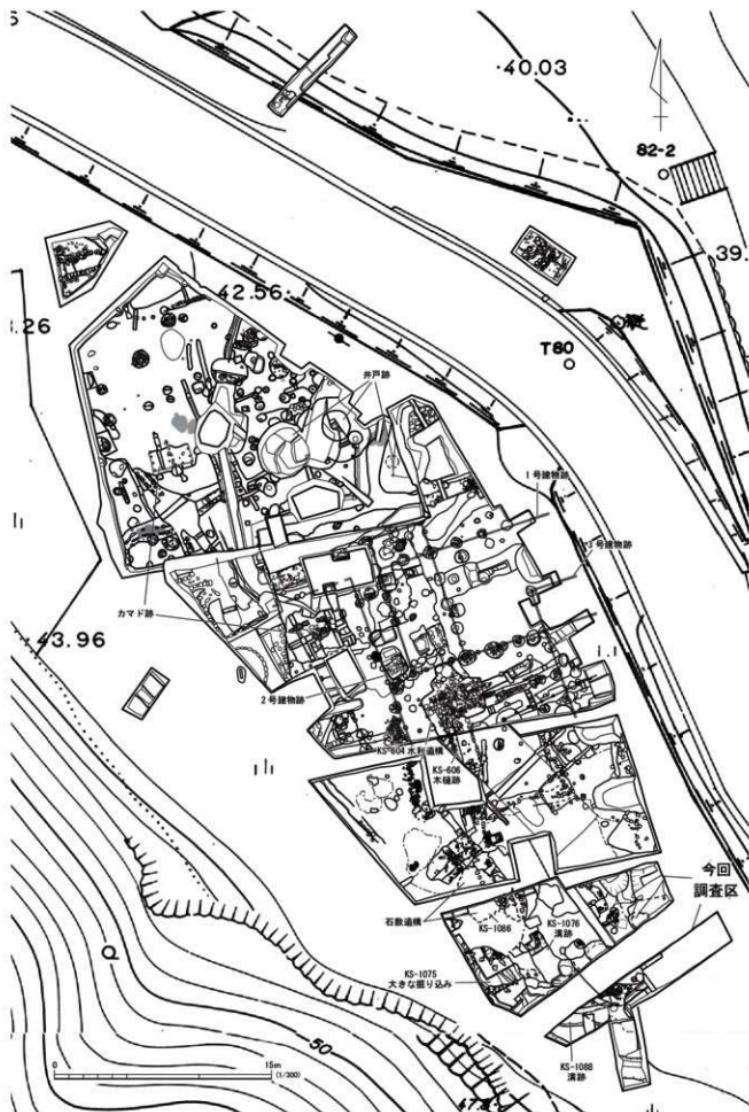
KS-1083 北区西側のXII層上面で確認した。重複関係はKS-1076・1085より古く、KS-1084より新しい。平面形は不明である。規模は長軸137cm、短軸123cm、深さ40cm以上である。KS-1076底面において直角に配置された2枚の板材を確認した。残存状態の良い板材は長さ80cm以上で、木枠の可能性がある。他の出土遺物はない。

KS-1084 北区西側のXII層上面において平面でのみ確認した。重複関係はKS-1083・1085より古い。平面形は不明である。規模は長軸60cm、短軸54cmである。遺物は瓦2点が出土した。

KS-1088 北区西側のXII層上面において平面でのみ確認した。重複関係はKS-1076・1078より新しい。平面形は長方形を呈する。規模は長軸102cm、短軸66cmである。出土遺物はない。

KS-1099 北区東側のX層上面において平面でのみ確認した。西側はベルト内に延びる。重複関係はKS-1094・1101より新しい、KS-1093より古い。平面形は方形を呈すると推定される。規模は、長軸94cm、短軸30cm以上である。出土遺物はない。

KS-1104 北区東側のIX a層上面で確認した。南側は調査区外に延びる。重複関係はKS-1110より古く、KS-1109より新しい。平面形は不明である。規模は長軸346cm以上、短軸108cm以上、深さ70cm以上である。遺物は磁器1点、陶器8点、土師質土器1点、瓦12点、金属製品1点が出土した。この内、19世紀前半の大堀相馬産黒釉碗(第9図2)



と銃弾(図版8-19)を掲載した。近代以降の遺構である。

KS-1109 北区東側のIXc層上面において平面でのみ確認した。重複関係はKS-1104より古い。平面形は不明である。規模は、長軸108cm、短軸52cmである。堆積土は4層に分かれる。出土遺物はない。

KS-1110 北区東側のXII層上面で確認した。北側、東側は調査区外に延びる。平面形は不明である。規模は、長軸234cm以上、短軸227cm以上、深さ114cm以上である。遺物は磁器6点、陶器15点、瓦24点、ガラス3点他が出土した。近代以降の遺構である。

KS-1111 北区西側のXII層上面で確認した。南側は調査区外に延びる。平面形は不明である。規模は長軸152cm以上、短軸118cm以上、深さ47cm以上である。堆積土は3層に分かれる。遺物は瓦6点、木製品10点が出土した。また、一部に亜炭片の集積が確認されたことから、近代以降の遺構である可能性が高い。

KS-1112 北区西側のXII層上面で確認した。重複関係はKS-1076より新しい。平面形は不整な楕円形を呈する。規模は、長軸128cm、短軸118cm、深さ40cmである。遺物は瓦が16点、木製品が11点出土した。KS-1111と同様、堆積土中に亜炭を含む。

(5) 石敷遺構(2基)

北区西側の北壁にかかるかたちで石敷遺構を確認した。便宜的に、小縁を主体とするKS-1086とやや大型の平坦な石材を複数配置したKS-1087とに分けたが、互いに隣接し同一面上に構築されていることから本来的には一体の遺構であると考えられる。年代は、VII層の年代から19世紀前半と考えられる。

KS-1086 北区西側のVII層上面で確認した。一部分布の途切れもあるが、東西約3.4m、南北約2mの範囲に径2~10cmの小石が敷きつめられた遺構である。北側は調査区外に延び、昨年度調査のKS-1053に連続するものと考えられる。

KS-1087 北区西側のVII層上面で確認した。径20~30cmの平坦な川原石を9石まとまった状態で確認した。北側は調査区外に延びる。昨年度調査では、KS-1053石敷の範囲内で南北方向に30cmほどの間隔で3石が並ぶ石列を確認しており、一連のものである可能性が考えられる。

(6) ピット(8基)

KS-1081・1082・1085・1093・1097・1100・1102・1106で、いずれも平面でのみ確認した。平面形は円形ないし楕円形で、規模は径20~50cmである。分布には特に傾向性はない。出土遺物はない。

(7) 性格不明遺構(5基)

KS-1089・1090・1101・1113・1115で、KS-1113を除く4基は平面でのみ確認した。平面形は不整形で、堆積土を掘削していない4基については、小規模な整地層の可能性も考えられる。KS-1113については一部掘削を行った。全体形状は不明だが、堆積土の特徴がKS-1110・1104の近代遺構に類似するため、同様の大型の土坑の可能性が考えられる。

4.まとめ

①第28次調査では、造酒屋敷地南部を対象に遺構確認を行ない、柱跡の可能性がある遺構7基、溝跡8条、岩盤を削る大きな掘り込み1基、石敷遺構2基、ピット8基、性格不明遺構5基を確認した。この内、KS-1075岩盤を削る大きな掘り込みとKS-1076溝跡は、造酒屋敷地南西部における水の管理に関わる遺構であると考えられる。今回の調査により、居住や造酒に関わる主要な建物、施設が置かれた敷地中央から北側と、水の管理に関わる施設が頗著な南側といった、造酒屋敷全体における大まかな施設配置の様相がより明確になった。

②近世とみられる遺構の年代は、特に重複関係の新しいものについては、基本層VII層の年代から、19世紀前半が中心になると推定される。

③遺物は、陶器、磁器、瓦、土師質土器、瓦質土器、木製品、石製品、金属製品が出土した。磁器は肥前産、陶器は大堀相馬産が主体で、年代的には18世紀から19世紀前半の資料が主体である。全体的に17世紀代の遺物は僅少だが、KS-1076溝跡から出土した備前産大甕は、過去の調査でも出土しており、造酒工程に関わる遺物として重要な資料である。

④造酒屋敷地全体の造成に関わる可能性のある整地層を確認した。造酒屋敷成立以前の築城期仙台城における、大手筋に配された曲輪の造成を示す重要なデータとなる可能性がある。今後の更なる調査、検討が必要である。

図版 1 第 28 次調査（造酒屋敷跡 5 次）



1. 調査区全景（北東から）



2. 北区西壁断面（北東から）



3. 北区北壁西側断面（南東から）



4. 北区北西隅部北壁断面（南から）



5. 北区南壁西側断面（北から）



6. 北区南壁東側断面（北西から）



7. KS-1076溝跡（南から）



8. KS-1076溝跡（北西から）

図版2 第28次調査（造酒屋敷跡5次）



9. KS-1083 木枠（南東から）



10. KS-1083（東から）



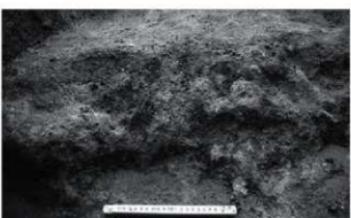
11. KS-1075 岩盤を削る大きな掘り込み（南から）



12. KS-1075 岩盤を削る大きな掘り込み（南東から）



13. KS-1075 岩盤を削る大きな掘り込み（東から）



14. KS-1075 岩盤を削る大きな掘り込み底面の加工痕跡（西南から）



15. KS-1075 岩盤を削る大きな掘り込み断面（南東から）



16. KS-1075 岩盤を削る大きな掘り込み大型礫出土状況（南から）

図版3 第28次調査（造酒屋敷跡5次）



17. KS-1074 土坑（北東から）



18. KS-1111 土坑（北西から）



19. KS-1112 土坑断面（北西から）



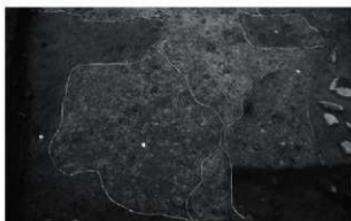
20. KS-1073 土坑断面（南東から）



21. KS-1104・1110 土坑（北東から）



22. KS-1110 土坑断面（南から）



23. KS-1078・1089・1090 検出（北西から）



24. KS-1079・1080・1081・1082 検出（西から）

図版4 第28次調査（造酒屋敷跡5次）



25. KS-1084・1085・1088 検出（北西から）



26. KS-1086・1087 石敷遺構（東から）



27. KS-1086・1087 石敷遺構（南から）



28. KS-1087 石敷遺構（南から）



29. KS-1077・1091・1092（南東から）



30. 北区東側遺構検出（南東から）



31. KS-1095・1096・1097・1098（南西から）



32. KS-1093・1094・1099・1100（東から）

図版 5 第 28 次調査（造酒屋敷跡 5 次）



33. KS-1115 (西から)



34. KS-1102・1103 (南から)



35. KS-1104 埋土中の集積 (北西から)



36. 南区全景 (東から)



37. 南区南壁断面 (北から)



38. 南区北壁・KS-1113 断面 (南東から)



39. 南区西壁断面 (北東から)



40. KS-1108・1116 (西から)

図版 6 第 28 次調査（造酒屋敷跡 5 次）



41. KS-1108 断面（東から）



42. KS-1107・1108・1114（北から）



43. KS-1116・1117（北西から）



44. KS-1107 集石遺構（南東から）



45. KS-1108・1114 溝跡（北西から）



46. KS-1108・1114 溝跡（南西から）

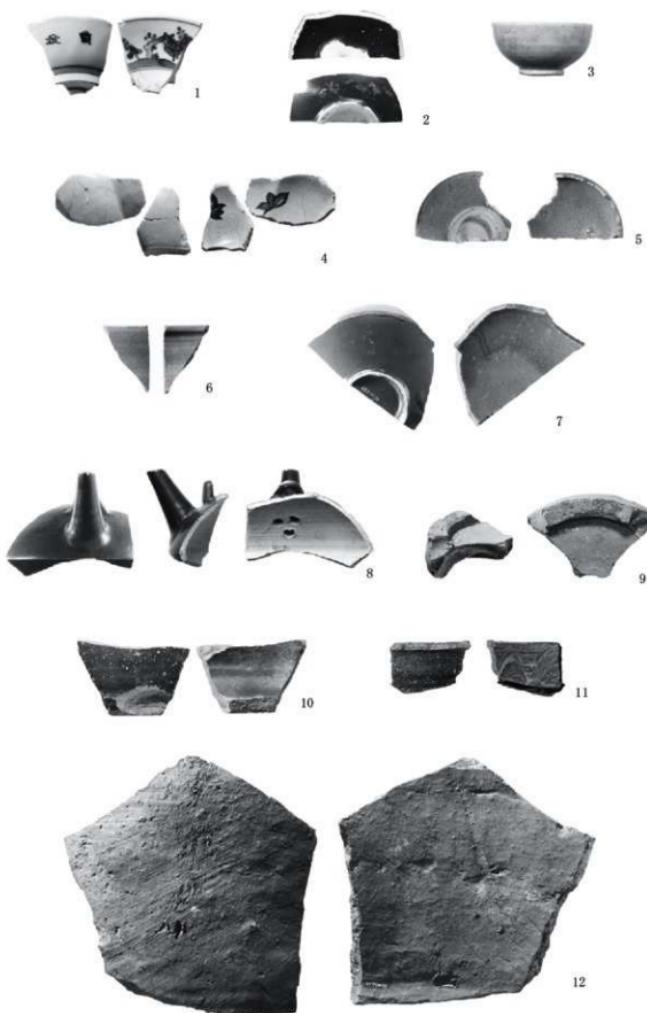


47. KS-1108・1114 溝跡断面（南西から）



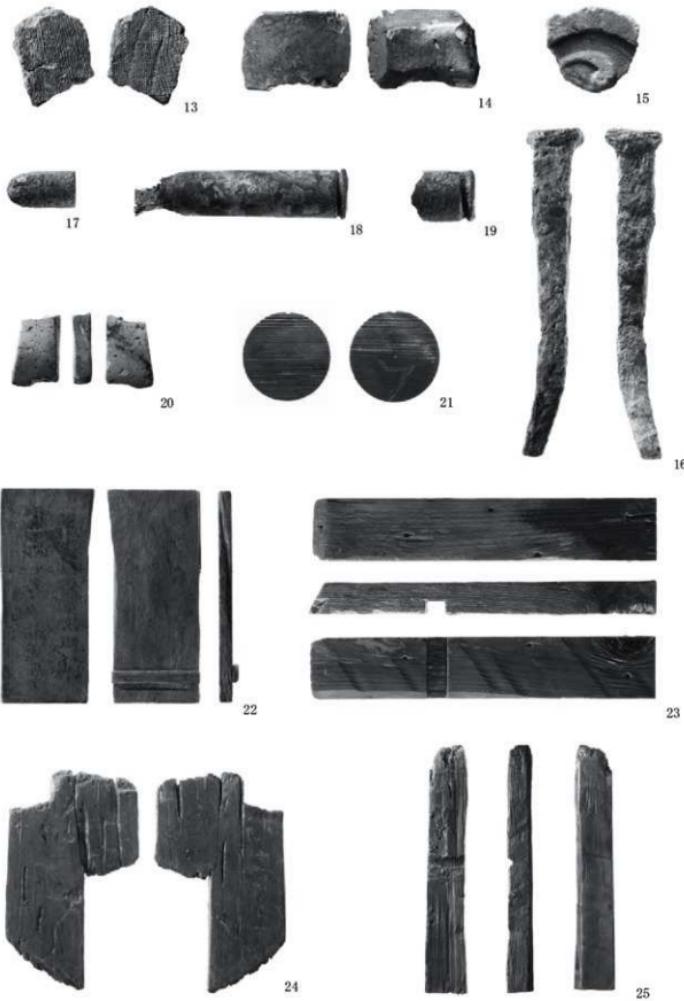
48. 遺跡見学会風景

図版7 第28次調査（造酒屋敷5次）



出土遺物（1）

図版8 第28次調査（造酒屋敷5次）



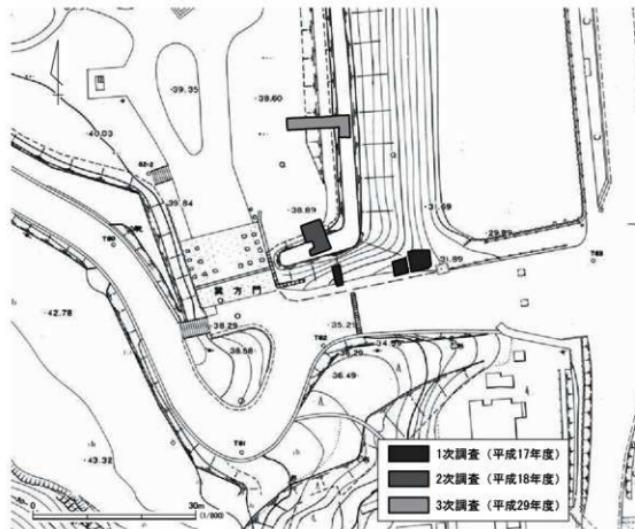
13～15・21～25 約1/4 16～19 約1/1 20 約1/3
出土遺物（2）

V. 第29次調査(三の丸土壘3次)

1. 調査の概要

(1) 調査目的

仙台城跡三の丸土壘は、『仙台城跡整備基本計画』(平成17年3月策定)において、「三の丸整備ゾーン」の「三の丸外構整備区域」として、「水堀や土塁等の近世城郭の外構としての遺構を顕在化」することや、「良好に保存されている土塁の修復」等の整備が計画されている。今回の調査は、これらの整備計画に基づいて土壘の保存状況や構造等の基本的な情報を得ることを目的として実施した。



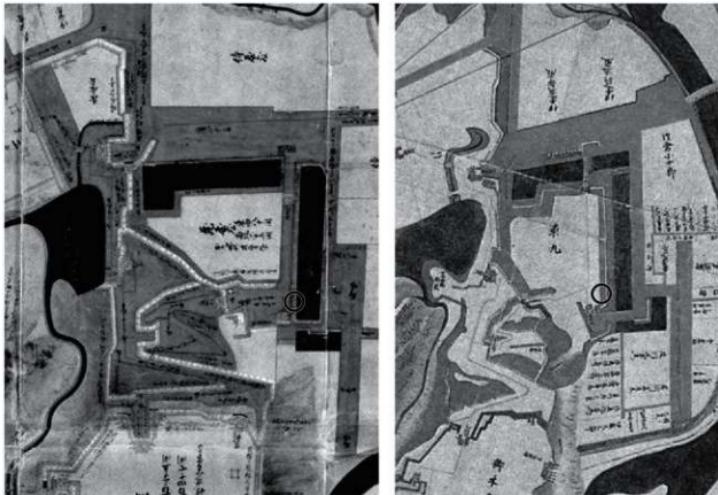
第12図 第29次調査地点の位置図

(2) 過去の調査と調査方法

三の丸跡の土壘については、『仙台城跡整備基本計画』に基づいて過去2度の発掘調査が行われている。平成17年の仙台城跡第13次調査(土壘1次)では、巽門跡の東側に接続する土壘の南面(谷側:第13次3・4・6トレーナー)を調査した。その結果、巽門跡から長沼南端の南西角に向かって土壘の基底部付近に部分的に確認されている列状に並ぶ切石は、石組側溝に伴うもので、一部は良好な状況で残存することが確認された。各トレーナーの土層の状況を総合すると、土壘積土基底部の標高が36.5m、そこから標高36.2mまでが旧表土及び漸移層、標高36.2m~32.4mが約4mの厚い段丘堆積物層、標高32.4m~31.6mが段丘縁層、標高31.6m以下が岩盤(凝灰岩質)となっていることや、現道路(登城路)面が、明治以降に1.5m程度の削平を受けていることが明らかになった。

平成18年の第16次調査(土壘2次)では、巽門跡の東側に接続する土壘の残存頂部から北面(山側・三の丸内側:第16次3区)を調査した。頂部平坦面では柵跡等を想定して遺構の検出作業を実施したが、柱穴等は確認できなかった。内側の平坦面では、17世紀後半主体と、18世紀前半主体の大きさ2時期の遺物包含層の存在が明らかになった。また、土壘の積土の残存頂部の標高は39.5mで、第13次調査の成果と合わせると、この付近の土壘積土の高さは3m以上であったと考えられている。

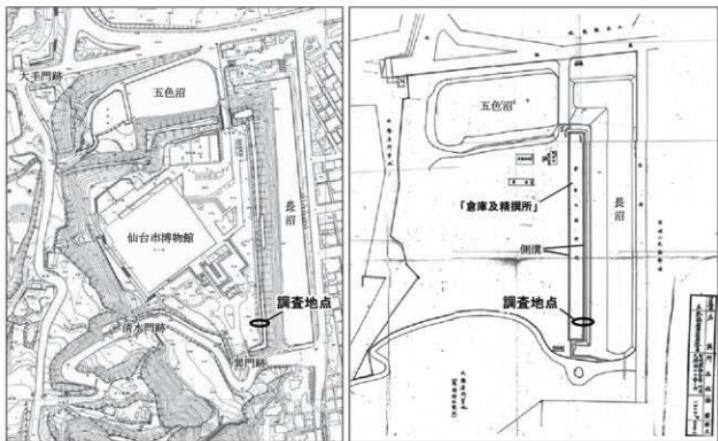
第29次調査(三の丸土塁 3次)



『奥州仙台城絵図』正保 2 年 (1645)

『仙台城下絵図』寛永元年 (1789)

第13図 近世絵図に描かれた三の丸(蔵屋敷・東丸)と土塁(○が調査地点):図は仙台市博物館所蔵



第14図 三の丸跡の現況図(左)と『第二師団經理部糧秣倉庫』図(右)

今回の第29次調査(三の丸土塁3次)は、土塁1次・2次調査区の北側に位置し、長沼の西岸に沿って南北に延びる土塁の南端近くで、土塁の頂部平坦面から三の丸内部の西側裾部を横断するように東西約12m・幅2mの調査区を設定した。

土塁の頂部平坦面の南側には、長さ約2m・幅2mの範囲で調査区を拡張し、柵跡等の検出作業を行った。昭和20年以前には、長沼に沿った土塁の内側裾部には『第二師団経理部倉庫』という名称の因に「倉庫及精査所」と標記される構で開まれた南北に長い建物が存在したが、戦後取り壊され、現在は東側外壁下部のコンクリート壁だけがほぼ埋もれた状態で残り、このコンクリート製の壁体が調査区中央を横断している。

調査は、土塁部分については、表土及び崩落土の除去後に頂部平坦面及び内側傾斜面の精査を行い、遺構の検出作業を行った。特に頂部については検出漏れがないように度数の掘下げと精査を行った。この結果、土塁様の落ち込みを3基検出した。

傾斜面の精査では内側下端付近で後述の近代石組み側溝に係る掘方を検出した。土塁内側の平坦面では、第二師団に関係する施設とみられる石組み側溝と建物内部に位置する水利施設の一部等を検出した。第二師団関係施設跡についても極力残すようにしたうえで、本地區の遺構・土層の形成過程についての情報を得るために、調査区北壁に沿ってトレチ状に掘り下げを行い、土層の観察を行った。

2. 基本層序

基本層序は、現表土層からこの付近の基盤である段丘堆積物層まで、大別18層、細別69層に細分された。

I-1～2層は現表土層、I-3層は山砂層で、昭和61年に仙台市博物館が改築された際の整地層とみられる。

II層は砂を含むまりの強い褐色のシルト質粘土層で、第二師団関係の建物解体から博物館建設(昭和36年)ないし博物館改築までの整地層と考えられる。

III層は、グライ化したぶい黄褐色のシルト・粘土を主体とする土層で、II層の整地が行われる前の崖地への堆積土とみられるが、時期・成因は不明である。

IV層-1層は、コンクリートの壁・床・基礎等の大小のコンクリート破片や、コンクリートの表面に上塗りされたモルタルの板状の破片、建物の基礎に使われていたと考えられる大型の玉石を多量に含む。第二師団関係の建物を解体した際の廃材を土塁と解体せず廃した「倉庫及精査所」の東側基礎部との間に投棄し、土を被せて処理したものと考えられる。

IV-2層は炭化物やガラス片を含むまりのない汚れた土層で、「倉庫及精査所」の廃止時の旧表土層、IV-3層は「倉庫及精査所」が存在した当時の土塁崩落土を見られる。

V層は、コンクリートの小片を含む黒褐色ないし暗褐色の粘土層で、「倉庫及精査所」の建設ないし解体に係る土層と考えられる。

VI層は、「倉庫及精査所」の東側雨落ち溝の掘方埋め立て、木端石や川砂も使われている。

VII層は、暗褐色土ないし黒褐色土からなる「倉庫及精査所」のコンクリート壁構築時の掘方埋め立て、基礎の下部には玉石が敷かれ、玉石の隙間に川砂が充填されている。

VIII層は褐色ないし暗褐色土で、VII-2層からは瓦や陶磁器片も出土している。形成時期は近世の可能性があるが、詳細は不明である。

IX層は、調査区西端部の崖地ないし溝状の落ち込みに堆積した土層で、ブロック状の堆積土を含む。グライ化した状態を呈す。

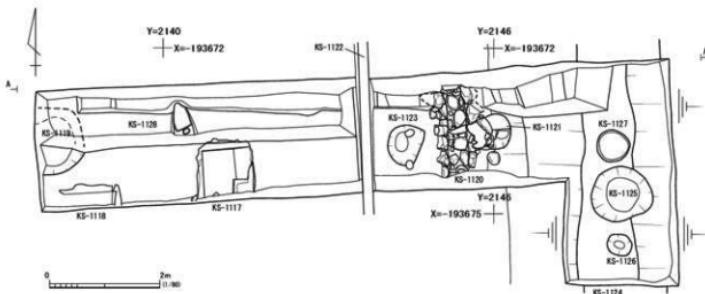
X層は、「倉庫及精査所」のコンクリート壁基礎掘方と、同所の雨落溝石組掘方に挟まれた部分に確認された明黄褐色土のブロックを含む黒褐色の粘土質シルトで、人为的堆積土と考えられるが、同じレベルにある土塁積土のXVI層とは層中に縞状の堆積が見られないことや、しまりが弱いなど様相を異にしている。XII層の近世整地層の延長ないし第二師団の施設建設に係る盛土の可能性が考えられる。

XI層は、円礫を含む黒褐色からぶい黄褐色土で、瓦片などの近世遺物を含む。近世期の堆積土層とみられる。

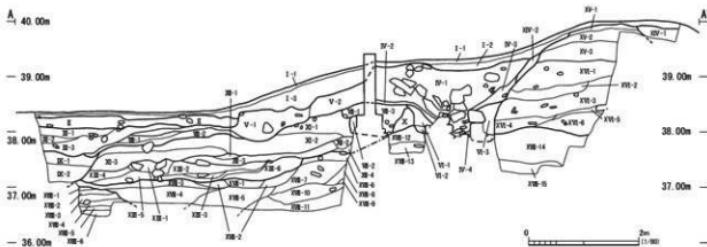
XII層は、暗褐色から黄褐色で、明黄褐色土の粒やブロックを含む人为的堆積土である。近世における整地土層と考えられる。

XIII層は、瓦片・巨礫・炭化物・灰等を含む近世の遺物包含層である。層中に酸化鉄を含む。

XIV層は、近世期の土塁崩落土ないし笹竹等の根による擾乱土層である。下部は石組みの雨落溝構築時に削平されている。



第15図 第29次調査区平面図



層位	土色		土質	土性		備考	
	上色 No.	土色		粘性	しまり	含有物質	成因・状況
I-1	10YR2/3	黒褐色	シルト	弱い		小繊を少量含む。	現表土
I-2	10YR3/4	暗褐色	シルト	弱い			現表土
I-3	5Y6/4	オリーブ灰色	砂	弱い	弱い	山砂、層の上面に磁鐵ネット敷設されている。	博物館のリニューアル工事に伴う土盛
II	10YR4/4	褐色	シルト質粘土	強い		砂を多く含む。藤灰岩の小ブロック、円礫を含む。	第1回調査設置体以後博物館までの整地土
III-1	10YR5/3	にふく・黃褐色	シルト	強い		大小の円礫含む。藤灰岩の大削片を含む。瓦片を含む。	
III-2	2.5Y5/2	暗泥灰色	シルト質粘土			黃褐色粘土のブロックを斑状に含む。円礫を少量含む。	
III-3	10YR5/4	にふく・黃褐色	粘土			灰黃褐色粘土のブロックを多く含む。	
IV-1	10YR3/4	暗褐色	シルト	なし		3~25 cmの纏、大小のコンクリート塊、板状のモルタル片を多量に含む。コンクリート塊は、壁面の剥離したものもある。	第二回調査設置体を解体した際の出たコンクリートが捨てられたと考えられる。
IV-2	10YR2/2	黒褐色	砂質シルト	なし		炭化物、ガラスを含む。	第二回調査時の表土層
IV-3	10YR3/4	暗褐色	シルト	弱い		10 cm前後の纏を少し含む。	第二回調査時の土壌崩落土
IV-4	10YR2/2	黒褐色	粘土質シルト			炭化物を少許含む。側溝底部に分布。	第二回調査時の側溝堆積土
V-1	10YR2/3	黒褐色	粘土	強い		砂を多く含む。大小の内縫に多量に含む。コシクリート片や瓦を含む。	第二回調査設置の成立から解体までの堆積土
V-2	10YR3/3	暗褐色	粘土			砂、小繊を含む。コンクリート片を含む。	
VI-1	10YR4/3	にふく・黃褐色	粘土質シルト	弱い		暗褐色粘土、黃褐色土のブロックを多量に含む。	
VI-2	2.5Y5/3	暗オリーブ褐色	砂	なし		裏込めの纏の隙間に分布する。	側溝石組みの側方埋め土
VI-3	10YR4/4	褐色	シルト	弱い		木端石を含む。瓦片を含む。	
VI-4	10YR2/3	黒褐色	シルト質粘土			鰐頭土粒、円礫を含む。	
VI-5	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土			小繊を少量含む。下部に川砂を含む。	
VI-6	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	あり		3~10 cmの纏を含む。暗褐色土のブロックを多量に含む。	現存のコンクリート壁の側方埋め土

第 16 図 第 29 次調査区北壁断面図

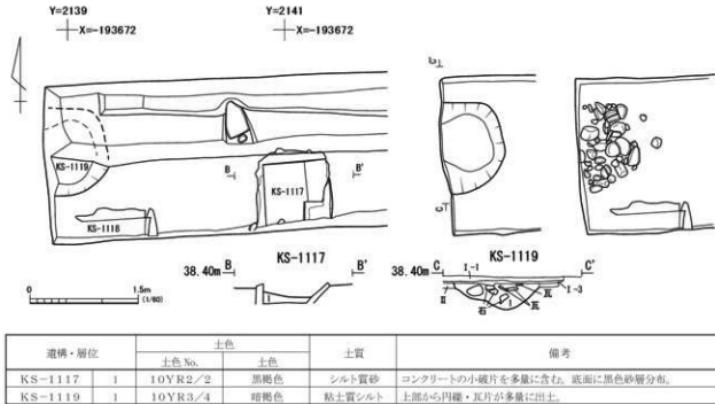
層位	土色		土質	土性		備考
	土色 No.	土色		粘性	しまり	
VII-1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	にあり、黄褐色の砂質粘土の小ブロックをわずかに含む。		
VII-2	10YR3/3	暗褐色	砂質粘土	小縫を含む。瓦・陶磁器片を含む。		
IX-1	2.5YR5/3	黄褐色	粘土質シルト	暗灰黄色粘土のブロックを含む。酸化鉄を斑状に含む。		
IX-2	10YR5/2	灰黄褐色	シルト質粘土	黄褐色粘土ワロッカ、砂を含む。		
X	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	褐色。明るい褐色土を小ブロック状に含む。		盛土層であるが近世か古代陥没か不明。
XI-1	10YR2/3	黒褐色	シルト質粘土	強い 凝灰岩粒、小の円礫、瓦片を含む。		
XI-2	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	大の円礫、炭化物を含む。比較的均質。		近世の堆積土層(遺物を含む)
XI-3	10YR4/3	にあり、黃褐色	シルト質粘土	小縫を多く含む。にあり、黄褐色の砂質を斑状に含む。瓦片出土。		
XII-1	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	明るい褐色土を多量に含む。		
XII-2	10YR3/5	暗褐色	シルト質粘土	明るい褐色土をまばらに含む。		近世の人の為の堆積土層(盛土・整地層)
XII-3	10YR5/6	黄褐色	粘土	暗褐色土をより明るい褐色粘土のブロックを多量に含む。		
XII-4	10YR3/3	暗褐色	粘土	黄褐色土ワロッカを多量に含む。		
XIII-1	7.5YR3/4	暗褐色	砂礫	巨礫を多数含む。酸化鉄を含む。		
XIII-2	7.5YR4/2	灰黄褐色	粘土	瓦片や大小の礫を含む。		
XIII-3	7.5YR4/1	褐色	粘土	礫を含む。酸化鉄を多量含む。		近世の堆積土層(遺物を含む)
XIII-4	10YR5/3	にあり、黃褐色	砂	灰褐色砂、酸化鉄をまばらに含む。瓦片出土。		
XIII-5	10YR2/1	黑色	粘土質シルト	炭化物、灰、礫を含む。		
XIII-6	10YR2/3	黒褐色	シルト質粘土	大の縫を含む。炭化物を含む。		
XIV-1	10YR3/4	暗褐色	シルト	小縫をわずかに含む。		土壌の崩落土及び根による擾乱層
XIV-2	10YR3/5	暗褐色	シルト	骨等の根が茂茂。		
XV-1	10YR3/3	暗褐色	シルト	なし 粗粒による縫隙が顕著。		
XV-2	10YR4/4	褐色	シルト	比較的均質。瓦片を含む。		土壌の種土(上部)
XV-3	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	なし にあり、黄褐色粘土をワロッカ状に含む。		
XVI-1	10YR4/3	にあり、黃褐色	シルト質粘土	強い 黄褐色及び暗褐色シルトのブロックをまばらに含む。大の円礫、凝灰岩礫を含む。西に下がって、縫状の堆積を呈す。		
XVI-2	10YR3/3	暗褐色	シルト質粘土	強い 黄褐色土、にあり、黄褐色土を直に含む。大小の円礫、凝灰岩礫片を含む。酸化鉄を含む。		
XVI-3	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	強い にあり、黄褐色の砂質シルトブロックを含む。凝灰岩礫を多量に含む。大小の円礫、酸化鉄を含む。西下がるのに堆積を呈す。		
XVI-4	10YR4/6	褐色	粘土質シルト	強い 黒褐色粘土質シルトを斑状に含む。凝灰岩の剝離片を含む。酸化鉄を含む。		
XVI-5	10YR2/3	黒褐色	粘土質シルト	強い 褐色の砂質シルトブロックを含む。酸化鉄を含む。		
XVI-6	10YR6/6	明黄褐色	粘土質シルト	強い 暗褐色土をワロッカ状に含む。3~5cmの縫及び凝灰岩礫片を多量に含む。縫状の堆積を呈す。		
XVII-1	10YR4/2	灰黄褐色	粘土	にあり、黄褐色粘土のブロックを含む。凝灰岩をまばらに含む。		
XVII-2	10YR4/3	にあり、黃褐色	粘土	灰褐色。黄褐色粘土、凝灰岩礫を含む。		
XVII-3	10YR6/3	にあり、黃褐色	シルト質粘土	明るい褐色の土をワロッカ状に含む。		
XVII-4	2.5YR6/3	にあり、黃褐色	粘土	暗リーフ褐色土のブロックを含む。		
XVII-5	10YR3/3	にあり、黃褐色	粘土	暗褐色粘土、黄褐色粘土、灰黄褐色粘土のブロックを多量に含む。		
XVII-6	10YR3/3	暗褐色	粘土	大手の円礫を多量に含む。黄褐色粘土の小ブロック、凝灰岩を含む。		
XVII-7	10YR5/6	黄褐色	粘土	大手の縫を直に含む。黄褐色粘土、褐色砂のブロックを多量に含む。		三の丸東部の盛土、整地層(XVII-11~14層)については土壌の種土の可能性もある
XVII-8	10YR2/3	黒褐色	粘土	褐色の土のブロックを斑状に含む。		
XVII-9	10YR6/4	にあり、黃褐色	粘土	黒褐色粘土ワロッカを含む。		
XVII-10	10YR6/5	にあり、黃褐色	粘土	縫を多量に含む。暗褐色粘土ワロッカを斑状に含む。		
XVII-11	2.5YR5/3	にあり、黃褐色	粘土	砂、黄褐色粘土ワロッカを含む。凝灰岩の大型塊をまばらに含む。		
XVII-12	10YR4/4	褐色	粘土	あり 暗褐色粘土質シルトをワロッカ状に含む。		
XVII-13	10YR6/2	灰黄褐色	砂質シルト	あり 黄褐色粘土ワロッカを含む。		
XVII-14	10YR5/3	にあり、黃褐色	砂質粘土	黒褐色粘土及び、にあり、黄褐色粘土の大型ブロックを含む。酸化鉄が多量含まれる。		
XVII-15	10YR5/6	黄褐色	砂礫	弱い 暗褐色粘土、にあり、黄褐色粘土をワロッカ状に含む。酸化鉄を多量含む。		
XVII-1	10YR6/3	にあり、黃褐色	シルト質粘土	小縫をわずかに含む		
XVII-2	10YR5/4	にあり、黃褐色	シルト質砂	凝灰岩を多量含む。		
XVII-3	2.5YR5/4	黄褐色	砂質シルト	暗灰黄色粘土を斑状に含む。		
XVII-4	2.5YR5/3	浅黄色	シルト質粘土	黒褐色粘土、オリーブ褐色粘土をワロッカ状に含む。		
XVII-5	10YR2/2	黒褐色	粘土	にあり、黄褐色土をワロッカ状に含む。		
XVII-6	2.5YR7/6	明黄褐色	シルト質粘土	風化した浅黄色凝灰岩の小片を多量に含む。		段丘堆積物

XV層は、土壌積土の上部を形成する土層で、ブロック状の堆積土も見られるが、かなりこなれた土壌である。層厚は65cm程度で、各層はほぼ水平に堆積し、層中から瓦片が多数出土している。

XVI層は、土壌積土の下部を形成する土層で、黒褐色から明黄褐色のシルト質粘土ないし粘土質シルトで、層中に縞状の堆積状況が認められる。細別各層中には、大小の円錐のほかに基盤層である凝灰岩の大小の破片を多量に含んでおり、層は堅く締っている。層厚は120~130cmで、西側が下がるような方向性を示すが、各層は概ね平行に堆積する。こまめにたたき締めながら積まれた土層で、土壌構築等の確実な堆積土層と認められる。遺物は出土していない。

XVII層は、確実な土壌積土より下位に堆積する人為的盛土層である。多様な土色を呈するブロック状の堆積土である。西部(XVII-1~11)と東部(XVII-12~15)では堆積状況が異なっており、西部は細別土層の傾きに規則性は認められず、しまりも比較的弱い。東側は土壌の下部や土壌に近い範囲に概ね水平方向に平行に堆積し、XVI層ほどではないが比較的締まっている。XVIII層については、三の丸南東角付近を平坦化するための盛土層と考えられるが、XVII-12~15層については、土壌積土の一部である可能性もある。ただし、XVI層のように締め固められて縞状を呈することはなく、特にXVII-14~15層は、土壤を形成するブロックが比較的大きな状態を保って堆積していることなど、XVI層と異なる状況を呈していることから、他地点と比較をしたうえで再検討する必要がある。

XVIII層は、黄褐色土を主体とするほぼ水平に堆積する土層で、ブロックないし粒状の土を含む。自然堆積土層と観察され、基盤の凝灰岩層とその上の段丘疊層のさらに上に堆積している段丘堆積物の一部と考えられる。



第17図 KS-1117・KS-1119 遺構・断面図

3. 検出遺構

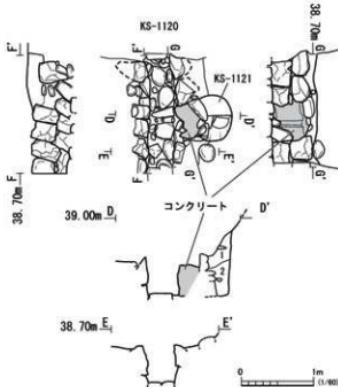
(1) 第二師団関係施設

KS-1117コンクリート施設 調査区西部の南壁付近のII層で検出されたコンクリート製の溝状の構造物である。残存部は内側の幅が52~58cmで『U』形を呈し、南側は調査区の外に延びる。東部は西に向かって下がり、南北方向は南側がわずかに下がる。内壁は厚さ1cm程度のモルタルできれいに仕上げられ、壁面はほぼ垂直に立つ。外側の壁面は水平方向・垂直方向共に凹凸が著しく、このため壁体のコンクリートの厚さは一定ではない。壁の外側に敷設のための掘方が確認できないことから、内側には木枠が設置されていたが、外側は掘方の土壁をそのまま外壁としてコンクリートを流した可能性が考えられる。第二師団の建物の床に設置されたコンクリート製の水利施設の残存部分とみられる。

KS-1118コンクリート施設 調査区西端の南壁付近で検出された。KS-1117と形状の類似したコンクリート製の構造物である。検出部は東西約110cm、南北約40cmの範囲である。北壁はほぼ垂直に立つが、東壁は東側に倒れ、両壁の接

統部分は離れている。施設撤去の際に壊れた可能性がある。KS-1117と同様に第二師団の建物の床に設置された水利施設の残存部分とみられる。第14図に示したとおり、この位置に第二師団当時の「倉庫及精撰所」があったことから、精撰所に伴う洗浄施設の残存部の床下にあたる可能性が推察される。

KS-1119土坑 調査区西壁付近のII層で検出された。検出部で直径約125cmの略円形を呈す遺構である。断面形は浅い船底状を呈し、検出面からの深さは35cm前後である。堆積土は暗褐色の粘土質シルトで、堆積土中から大小の円礫が出土している。礫は層の上部に密度が高く存在した。礫以外にはレンガ片や瓦片も出土している。第二師団またはそれ以前の廃棄に係る遺構とみられる。



第18図 KS-1120・KS-1121 実測図

KS-1120石組側溝 調査区中央に南北に残る「倉庫及精撰所」の東側壁面基部と並行し、現存土堤の西壁下端部で検出された。基本的には間知状の石材を組んで壁体が築かれた側溝で、一部円礫も混じる。「倉庫及精撰所」の東側壁面から側溝中央までの距離は約150cmある。溝の内面幅は30cm前後、深さは50cm前後である。溝底面には側石の内側に、上面が平らな大小の礫が敷きされている。溝の内部堆積土から多くのコンクリート片や礫が出し、「倉庫及精撰所」が解体される間際まで開口していたと考えられる。溝の内部に堆積した自然層は、底部の角付近に炭化物を含む黒褐色土が認められるだけ(第16図IV-4層)で、廃棄直前まで良好管理されていたと推察される。東側の石組みは上下2段が基本で、側溝前面からの幅が50cm前後の掘方がある掘方の一部は土堤基部を掘り込んでおり、埋め土は褐色土で、木端石を含む。西側の石組みも上下2段が基本で、側溝前面からの幅が60~70cmの掘方があり、掘方底面付近には川砂が認められる。東側の石組みの石材は、石面が長軸30~40cm、短軸20~30cm、控えの長さが30cm前後の石が主体で、長軸は縦方向と横方向の両方の使い方が認められる。西側の石組みは、石面が長軸25~40cm、短軸18~25cmの長方形の石材が主体で、控えの長さは30~45cm程度である。長軸は基本的に縦方向に積まれているが、上段・下段の石材とも上方が北側に倒れている。側溝の主体となる石材は、仙台城の石垣の石材と共通する状況を呈し、玄武岩ないし玄武岩質安山岩と観察される。この側溝については、『第二師団經理部櫓株倉庫』図の「倉庫及精撰所」の周囲に2重線で記載されている雨落下溝に相当する遺構と考えられる。

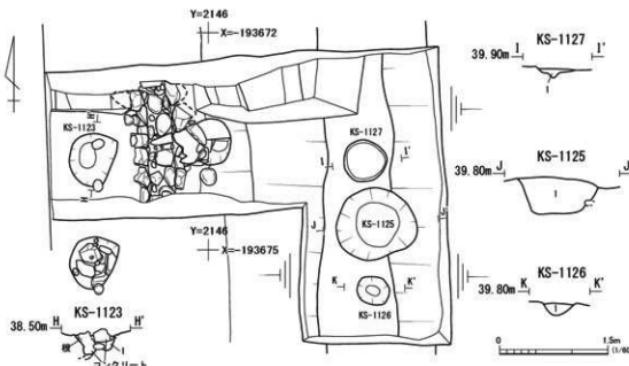
KS-1121土坑 石組側溝の東側側面上には、一部石積みの欠損する箇所があり、この部分には土塁の積土を切って南北の軸長65cm・深さ約90cmの円形の穴が掘られ、その中に平坦面を西側に向けて半円柱状のコンクリート塊が入れられて

いる。石組みの欠損部分を補充するために入れたものか、何らかの構造物として入れられたのかは不明である。

KS-1122コンクリート壁 調査区の中央を横断するコンクリート製の壁は、子門跡付近から翼門跡付近まで土壌と並行し、約180mにわたって存在する。「倉庫及精撰所」の東側の壁の基部の残存と推定される。断面形は逆T字状を呈し、基底部幅が48cm、壁の立ち上がり110cm、壁の厚さ18cmを測る。掘方の埋め土は黒褐色ないし暗褐色で、土台部には円礫とその隙間に川砂が入れられている。

KS-1123土坑 KS-1120石組側溝とKS-1122コンクリート壁の間のIV-2層直下で検出された。南北長軸74cm、東西短軸60cm、深さ約30cmの土坑である。穴の中からは、方形のほどぞ穴の開いた略方形のコンクリートブロックが斜めに傾いた状態で出土した。このほかにもコンクリート片や円礫などが入っていた。

KS-1128遺構 IX-1~2層は、近世の堆積土であるXI層・XIII層を切るように掘り込まれており、V層・VII層を挟んでIII層の堆積終了時までかかつて埋没した土坑ないし溝状の遺構の堆積土である。グライ化傾向にある黄褐色を基調とした土壤で、瓦片等が出土している。廢城後、「倉庫及精撰所」建設までの期間の遺構と考えられるが、詳細は不明である。



遺構・層位	土色		備考
	土色No.	土色	
KS-1123	I	10YR 2/3	黒褐色 粘土質シルト 砂・炭化物粒を含む。
KS-1125	I	10YR 3/4	暗褐色 粘土質シルト 小礫を少量含む。比較的均質な土壤。
KS-1126	I	10YR 4/4	褐色 シルト質粘土 黒褐色及び明褐色土の小ブロックを多量に含む。
KS-1127	I	10YR 2/3	褐色 シルト質粘土 褐色土のブロックを含む。全体がブロック土の堆積。

第19図 KS-1123・1125・1126・1127 遺構実測図

(2) 土壌

KS-1124土壌 調査部の土壌は、上面幅が約150cm、西側裾部の傾斜変換点からの高さは約60cm、石組側溝の天端からの高さ160cm、長沼の水面からの高さは11m前後、西壁面の傾斜角度は現況で50°前後である。土壌部分の積土は大きく3層に大別される。上部のXV-1~3層は、ややしまりに欠けるが、ブロック状の土壤が混ざり、人為的な積土と認められる。層厚は3層合わせて60cm前後で、概ね水平・平行に堆積する。各層から瓦片が出土している。中部のXVI-1~6層は、円礫及びこの付近の基盤層となっている凝灰岩の大小の破片を多量に含むブロック状の土壤からなり、層厚は120cm~140cm。調査部分では東から西側に下がるように堆積する。細別層に広疣があるが、各層ともよく固く締り、各層中には縞状の細層が認められる。遺物は出土していない。その下のXVII-14~15層及びXVII-12~13層は、円礫や凝灰岩の破片を含むブロック状の積土で、ブロックの粒度はXVI層に比べると大きく、締りも弱い。層厚は80cm以上あり、全体として水平に近い堆積状況である。遺物は出土していない。XVI層は土壌構築時の積土とみられる。XV層は、土壌の修築等の後世の積土と考えられるが、その時期についてでは近世期か近代以降に下るものか明らかでない。XVII層は、X

VI層と比べると引き締めの割合が低いことから、作業状況が区別される。土壌の積土ではなく、三の丸南東部全体の整地層の可能性もある。

KS-1125土坑 調査した土壌の中央で検出された。東西110cm・南北100cmの略円形を呈する深さ50cm前後の土坑で、堆積土はほぼ均質の暗褐色土である。現在、土壌の上には6~7m間隔で近代以降に植えられたサクラがあるが、当該地點には木が生えておらず、南北のサクラから6~7mの距離にあることから、この土坑については、木は枯れて存在しないが、植樹をした時の掘方跡とみられる。

KS-1126土坑 土壌上面の南部で検出された土坑で、東西45cm・南北36cmの梢円形を呈し、深さは15cmである。堆積土は黒褐色土及び明黄褐色土のブロックを含む褐色土で、遺物は出土していない。

KS-1127土坑 土壌上面の北部で検出された土坑で、東西60cm・南北58cmの円形を呈し、深さは14cmである。堆積土は褐色土のブロックを含む黒褐色土で、遺物は出土していない。

(3) 近世堆積土層

近世に形成された人為的あるいは生活の中で形成された土層には、土壌以外には三の丸の造成に係る盛土層、表土としての経過する中で形成された堆積土層が2面、その間に形成された整地土層が1面ある。

近世盛土層 XV-1~11層は、ブロック状の土壤からなり、概ね土壌側から三の丸側に下がる方向で堆積するが、部分的には低いところを埋めるような状況を示す。ブロックないし粒状の土壤からなる人為的な堆積土層である。円礫が含まれるが、凝灰岩の破片は少ない。全体的に締りは弱い。XV-12~15層を含めて、三の丸南東部の崖地を埋める、あるいは傾斜地を平坦化するために行われた盛土、整地層の可能性が考えられる。

近世表土層1 X-III層は、全体的に暗く炭化物粒などが認められる汚れた感じのするランダムな堆積土で、陶磁器や瓦片を含む遺物を含む層である。X-III層は層厚が15~35cmある。締りは弱く、大きな礫を多く含む。

近世整地層 X-II層は、X-III層とX-I層に挟まれた黄褐色を基調とするシルト質粘土ないし粘土層で、明黄褐色のブロック土を含んでいる。上面には多少の起伏が認められるが、何らかの理由で実施された整地作業に伴う盛土層と考えられる。

近世表土層2 XI層は、炭化物や小礫が認められる堆積土で、瓦片を含む。各層とも概ね水平に堆積する。層厚は3層合わせて30~50cmある。XI-1層は締りが強い。この層を掘り込んで「倉庫及精耕所」の基礎が造られていることから、近世(近代の一部を含む可能性を含む)の表土層として形成されたものと推定される。

4. 出土遺物

土壌の状況確認を目的とした第29次調査の出土遺物は、土壌の積土や盛土・整地層、ある時期の表土層、自然堆積層、何らかの遺構堆積層を含む基本層などから瓦片や陶磁器片・ガラス片を主体に1027点が取り上げられている(第5表 第29次調査出土遺物集計表)。このうちI層からX層の出土遺物は、堆積層の年代が近代以降のもので、XI層からXV層の遺物が近世期に考えられるものである。

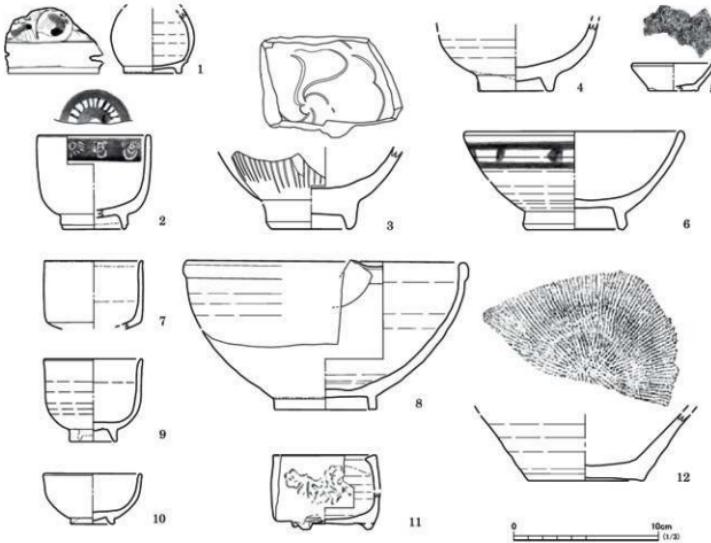
VI-1層からは、多量の板状ないし容器の一部とみられるガラス片と共に、戦前の20世紀代と考えられる瀬戸美濃産の湯飲み茶碗などが出土し、同層が第二師団関係の建物の廃棄に関係すると考えたことと整合する。

X-I層は「近世表土層2」として既述した土層で、近世期の表土層の上部にあたる。多数の磁器・陶器・瓦片と共に土師質土器・瓦質土器・土製品・金属製品・石製品など多様な遺物が出土している。XI層からの出土遺物については、第20・21図及び写真図版14・15に示した。陶磁器の年代は18世紀から19世紀中頃までの相馬大堀産や在地のものがほとんどで、同層はこのころに形成されたことが考えられる。16世紀代の年代が考えられる中国産磁器の碗(第20図3)は、伝世品がこの時期に廃棄されたと考えられる。

X-II層は、「近世表土層1」と「近世表土層2」に挟まれた整地層と考えられる土層で、少量の磁器・土師質土器と多数の瓦片が出土している。大型の丸瓦片を第21図22に図示したが、X-II層の堆積年代を特定できる遺物はない。整地土中から多数の瓦が出土したことについては、X-II層の素材となる土壤採取地点に何らかの事情で瓦が散乱していたか、本地点の周間に瓦が散乱する状況があつたことなどが考えられる。

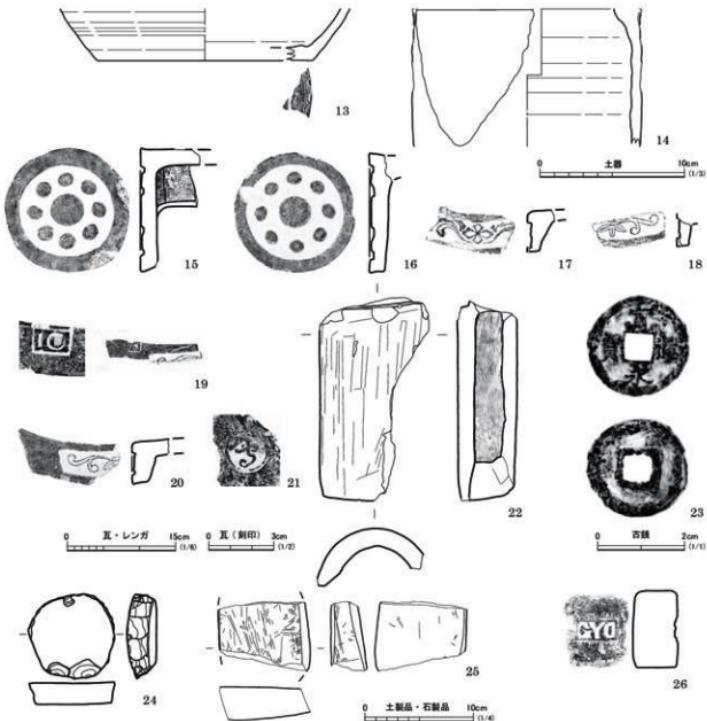
X-III層は「近世表土層1」とした層で、三の丸造成に係る盛土層と考えられるXV層の上に堆積する炭化物を含む汚れた状況を呈する土層であることから、近世期の表土層の下部と考えた土層である。出土遺物は少なく、瓦の小片が4点あるだけで、固化した遺物はない。

第29次調査(三の丸土塁3次)



図中 番号	遺物番 号	種別	種類	層位・遺構	生産地	器種	製作年代	法量 (mm)	釉薬・文様等	備考	写真 図版
1	038	磁器	染付	B~V	肥前	鶴首瓶	18c後半	口径(+)底径(60) 器高44~	墨文	小型	1
2	071	磁器		XI	鹿戸美濃	酒飲茶碗	19c 中	口径(79) 底径(44) 器高65	瑠璃釉 火炎宝珠	焼き接ぎ瓶あり 墨はじき	2
3	136	磁器	青磁	XI	中国	碗	16c	口径(+)底径(62) 器高56~	磁継連文見 込みに花文	使用感あり	3
4	006	磁器	V	肥前	鉢	18c か	口径(126) 底径(62) 器高47~	外面・宝文		14	
5	006-008	磁器	染付	XI	肥前	小坪	18c	口径(70) 底径(+) 器高30~	草文		15
6	051	磁器	IV-1	漸戸美濃	酒飲茶碗	昭和戰前 20c 前	口径(126) 底径(62) 器高49	色絵(呂宋鉄絵)	高台内銘「音波國」		17
7	054	磁器	IV-1	漸戸美濃	じんざり皿	19c ~ 20c	口径(68) つまみ56 器高38	色絵・草花文		18	
8	064	磁器	XII	肥前	碗	18c 後~19c 初	-	-	素面手作(唐書記)		16
9	022	陶器	I~I-2	小野相馬	碗	18c	口径(+)底径(52) 器高46~	淡青色釉		4	
10	031	陶器	B~V	雄堀	すり鉢	19c	口径(56) 直径(+) 器高19	鉢袖	ミニチュア	5	
11	044	陶器	IV-1	唐津	碗	17c 後半	口径(120) 底径(72) 器高68	長石袖・鉄絵		6	
12	009	陶器	V	大垣相馬	漬物	19c 前~中	口径(68) 底径(+) 器高47~	灰袖		7	
13	081	陶器	XI	大垣相馬	片口鉢	18c 後半~19c 前半	口径(189) 直径(76) 器高103	白陶袖		11	
14	098	陶器	XI	大垣相馬	小坪	18c 後半	口径(68) 直径(33) 器高48	白陶袖		8	
15	086	陶器	XI	大垣相馬	小坪	18 現半	口径(68) 底径(30) 器高35	灰袖		9	
16	097	陶器	XI	美濃	香炉	19c	口径(72) 底径(+) 器高52	長石袖	型取面(重文の香炉)	10	
17	122	陶器	XI	在地	すり鉢	18c 以降	口径(+) 底径(30) 器高45~	灰袖		12	
18	018	陶器	V	堺	小盤	19c	口径(+) 底径(46) 器高20~	鉄袖		23	
19	053	陶器	IV-1	不明	酒飲茶碗	不明	口径(90) 底径(+) 器高47	色絵	透明袖の上から 鉄絵で縁取り	14	
20	079	陶器	刻印	XI	波佐見焼	鉢	17c末~18c 前	口径(120) 底径(+) 器高55~	唐草文か		21
21	087	陶器	XI	大垣相馬	碗	18c	口径(+) 底径(+) 器高50~	白陶袖	鉄絵没し	22	
22	105	陶器	XI	大垣相馬	仏壇器	18c	口径(66) 底径(+) 器高26~	灰袖		19	
23	112	陶器	XI	大垣相馬	瓶	19c 前~中	口径(120) 底径(+) 器高48~	白陶袖	鉄絵没し	20	
24	114	陶器	XI	大垣相馬	碗	18c	口径(90) 底径(+) 器高45~	灰袖		25	
25	116	陶器	XI	堺小	すり鉢	18c 以降	口径(45) 底径(+) 器高22~	鉄袖	凸帯2条	27	
26	126	陶器	XI	漸戸美濃	土瓶	18c ~ 19c	口径(70) 底径(+) 器高93~	長石袖	225g毛 内面に付 着物跡(淡紫)	26	
27	130	陶器	XI	不明	瓶	19c 前~中	口径(+) 底径(60) 器高55~	鉄袖		24	

第20図 第29次調査出土遺物(1)



図中 番号	遺物番号	種別	種類	層位・遺構	製作年代	法量 (mm)	重量 (g)	備考	写真 図版
13	123	土師質土器	はうろく	X I	18c 小	口径(200) 斜径(150) ~ 器高(39)	-	-	
14	140	瓦質土器	手あぶり	X I	江戸時代	口径(158) 斜径(-) 器高(97)	-	丸窓・口沿部に龜甲彫あり	40
15	143	瓦	軒丸(九曜文)	X I		長さ(88) 瓦当幅(55) 内区幅(123) 周縁幅(21) 瓦当厚み(23)	1075		31
16	029	瓦	軒丸(九曜文)	I - I · 2		瓦当径(165) 内区径(128) 周縁幅(17) 周縁深(6) 瓦当厚み(22)	770		28
17	142	瓦	軒平(花差文)	X I		瓦当幅(148) 高さ(56) 瓦当厚み(15) 内区幅(112)	210		33
18	152	瓦	軒平(雪待ち型)	X I		瓦当幅(157) 瓦当厚み(15) 内区幅(105) 内高さ(25) 周縁深(4)	90		34
20	155	瓦	軒平(雪待ち型)	X I		長さ(160) 厚み(22) 瓦当幅(145) 瓦当高さ(57) 瓦当厚み(22) 内区高さ(27) 周縁深(4)	585		36
22	062	瓦	丸	X II		前縁(95) 後縁(150) 長さ(280) 高さ(80) 厚み(24)	1380		32
19	055	瓦	軒平瓦	V		五線先幅(71) 玉筋長さ(8)	350	刻印	29
21	060	瓦	鰐瓦	II ~ V			520	刻印	30
144	瓦	軒平瓦(唐草)	X I	17c か		瓦当高(360) 瓦当厚(24) 瓦当幅(380) 内区高さ(33) 周縁深(9)	185		35
145	瓦	軒丸(珠文三三式)	X I	江戸前1か		周縁幅(21) 周縁深(8)	70		38
153	瓦	鰐り	X I			長さ(129) 幅(105) 厚み(53)	420	鬼瓦の一部	37
23	196	金属	古銭	X I		直徑(23.4) 斜径(6.3)	2.05	寛永通宝	42
24	150	土製品	円盤状土製品	X I	江戸時代	長さ(78) 幅(80) 厚み(19.5)	150	平瓦軒用	43
059	土製品	円盤状土製品	B ~ V			長さ(65) 幅(64) 厚み(19)	100	平瓦軒用	44
25	043	石製品	礫石	X I		長さ(63) 幅(84) 厚み(31)	245		41
26	156	その他	レンガ	I - I · 2		長さ(92) 幅(36) 厚み(62)	865	砂粒多い	45

第21図 第29次調査出土遺物(2)

第5表 第29次調査出土遺物集計表

層位・遺構	磁器	陶器	土師質土器	瓦質土器	wv	土製品	金屬製品	石製品	ガラス	その他	総計
I					16						16
I~I+2	25	23	4		37		1		15	6	111
II		1			16						17
II~V	29	4			64		7		1	3	108
II~V		1								2	3
IV-1	7	9			1		33		162	2	214
IV-2	0	1			5						6
V	10	18	2		91						121
VII		1			1						2
VII-2		1			28						29
VIII	3	1	1		20				1		26
X I	22	49	11	5	208	1	3	1			300
X II	2		2		52						56
X III					6						6
X V					4						4
KS-1123								5			5
(空白)										3	3
総計	98	109	20	5	549	1	49	1	179	16	1027

5.まとめ

- ①調査地点の土塁部は、大きく3層に区分され、上層は瓦片を含む近世以降の積土、中層は無遺物の土塁構築時の積土、下層は三の丸の整地のための盛土ないし土塁の下部盛土層と考えられる土層からなる。
- ②現状の土塁の高さは、堀の現汀線から約11m、三の丸跡の現地表面から1.6m、旧地表面(X I層)から約2mである。頂部の幅は1.6m前後である。
- ③現存土塁の上面では、柵や土壠に係る遺構は検出されず、瓦についてもまとまった出土はなかった。また、土塁切削部では中層の上面からの掘り込みも認められなかった。
- ④今回の第29次調査地点の三の丸東側の近世期の表土層は、間に整地層を挟んで上下大別層で2層あり、上部のX I-1~3層は第16次調査の3区(三の丸土塁南側)のIII層、下部のX II-1~6層は第16次調査3区のIVb~IVd層に、中間の整地層のX II-1~4層は第16次調査のIVa層(遺物が少なく、しまりの強い褐色土層)に対応することが考えられ、第16次調査III層の年代が18世紀後半から19世紀前半とされており、年代的にも概ね一致している。(仙台市文化財報告書第309集仙台城7、36頁・38頁・57頁)
- ⑤『第二師団経理部糧秣倉庫』図の「倉庫及精撰所」は、戦後に取り壊されたが、東側雨落溝、東側壁面基部、床下のコンクリート・製水利施設等の遺構が残っている。建物解体の際に出たコンクリートや玉石などの石材は、土塁と東側の壁面の間にも大量に投棄されている。

図版9 第29次調査（三の丸土壘3次）



1. 三の丸土壘南部の現状（北から）



2. 長沼から見た三の丸土壘（南東から）



3. 第29次調査区付近の状況（北西から）



4. 第29次調査区全景（手前西区・奥東区：西から）

図版 10 第 29 次調査（三の丸土塁 3 次）



5. 西区 II 層上面（近代）検出状況（西から）



6. KS-1117 遺構（南から）



7. KS-1118 遺構（西から）



8. KS-1119 土坑上部（南から）

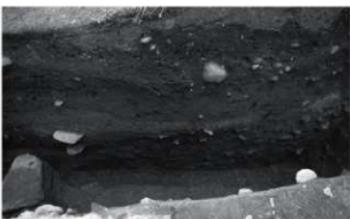


9. KS-1119 土坑と断面（東から）

図版 11 第 29 次調査（三の丸土壙 3 次）



10. 西区断面西部（南から）



11. 西区断面東部（南から）



12. 西区西端下部XVII層（南から）



13. 西区建物壁基礎付近（南から）



14. 東区全景と土壙上面検出の土坑（南から）

図版 12 第 29 次調査（三の丸土壙 3 次）



15. 東区断面（南西から）



16. KS-1120 石組側溝検出状況（南から）



17. KS-1120 石組側溝（南から）



18. KS-1120 石組側溝西面（北東から）



19. KS-1120 石組側溝東面（西から）

図版 13 第 29 次調査（三の丸土壙 3 次）



20. 東区断面西半部（南から）



21. 東区断面西部下半（南から）



22. 東区断面東部（土壙）上半（南から）



23. 東区断面東部（土壙）下半（南から）



24. KS-1123 土坑（東から）



25. KS-1125（南から）



26. KS-1126 土坑（南から）



27. KS-1127 土坑（東から）

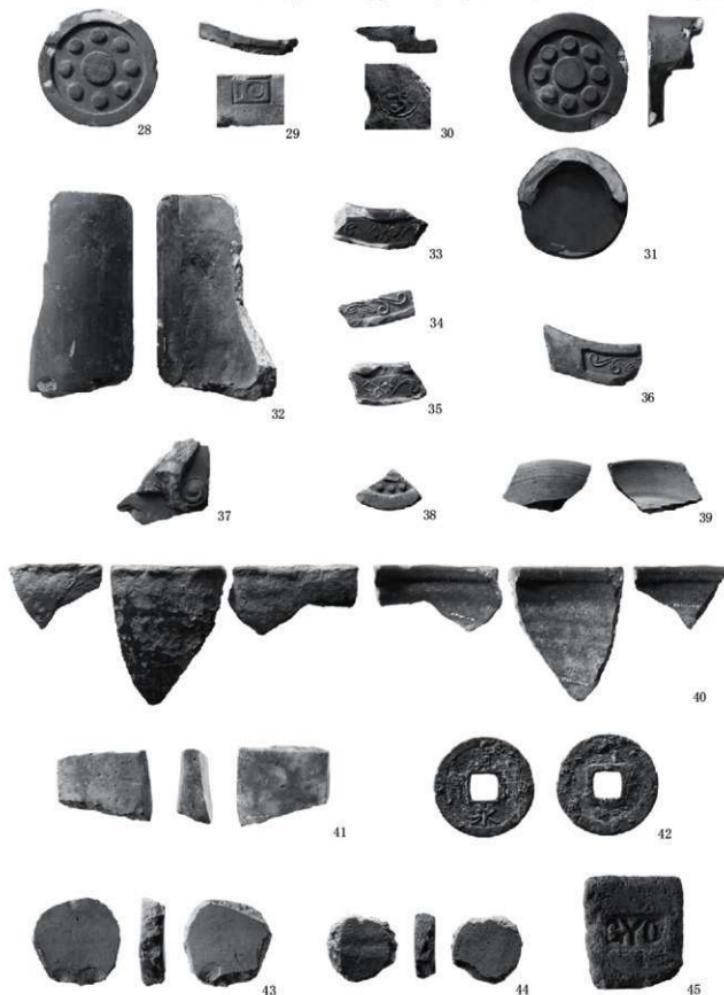
図版 14 第 29 次調査（三の丸土壙 3 次）



出土遺物 (1)

1 ~ 27 約 1/3

図版 15 第 29 次調査（三の丸土壙 3 次）



28 ~ 38・45 約 1/6
29・30(刻印) 約 1/2 39・40 約 1/3
41・43・44 約 1/4 42 約 1/1

報告書抄録

ふりがな	せんだいじょうあと						
書名	仙台城跡 13						
副書名	—平成29年度 調査報告書—						
巻次	13						
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第471集						
編著者名	鈴木隆、工藤哲司、齋藤健一						
編集機関	仙台市教育委員会						
所在地	〒980-0011 仙台市青葉区上杉一丁目5番12号 上杉分庁舎 TEL 022-214-8544						
発行年月日	2018年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	調査拠点	コード		調査期間	調査面積	調査原因
			市町村	遺跡番号			
		04100	01033				
		北緯	東経				
せんだいじょうあと 仙台城跡	宮城県仙台市 青葉区川内地内	造酒屋敷跡 (5次) 〔第28次調査〕	38° 15' 17"	140° 51' 26"	2017.7.5 ~ 2017.11.15	110 m ²	重要遺跡 の遺構確 認調査
		三の丸土壘 (3次) 〔第29次調査〕	38° 15' 07"	140° 51' 41"	2017.9.4 ~ 2017.11.15	25 m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			
仙台城跡	城館跡	江戸時代	礎石跡、石列、溝跡、 土坑、石敷	陶磁器、土器、瓦、レンガ、 金属製品、木製品			
要約	国庫補助事業として仙台城跡第28・29次調査を実施した。造酒屋敷地の南部を対象に実施した第28次調査では、近世の溝跡、土坑、岩盤を振り込んだ大型の遺構、木棒を伴う遺構のほか、陶器、磁器、瓦、木製品などが出土した。また、造酒屋敷地のある平場の造成に関わる整地層を確認した。 第29次調査の三の丸土壘では、土壘の積土の規模や土層の特徴を明らかにすると共に、土壘内部における少なくとも2時期の整地層を確認した。遺物は、遺物包含層から18～19世紀前半を中心とする陶器、磁器のほか瓦、金属製品、石製品などが出土した。						

仙台市文化財調査報告書第471集

仙台城跡 13

—平成29年度 調査報告書—

2018年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区上杉一丁目5番12号

仙台市役所上杉分庁舎

文化財課 TEL 022(214)8544

印刷 株式会社 仙台紙工印刷

宮城県仙台市宮城野区赤竹二丁目1-14

TEL 022(230)2285(代)